第2章

1. 金沢大学宝町遺跡

1. はじめに

金沢大学宝町遺跡は、金沢大学医学部附属病院地区と金沢大学医学部グラウンド、金沢大学医学部保健学科地区で確認された遺跡の総称である。各場所ごとの遺跡の名称は、金沢大学宝町遺跡(医学部附属病院地区)、金沢大学宝町遺跡医学部グラウンド地点、金沢大学宝町遺跡(医学部保健学科地区)であり、金沢大学宝町遺跡(医学部附属病院地区)には、病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点、包み込みの森98地点、中央設備室地点、病棟Ⅱ地点、精神科病棟Ⅱ地点が含まれ、宝町遺跡(医学部保健学科地区)には、校舎Ⅰ地点、校舎Ⅰ基幹整備地点、校舎Ⅱ地点が含まれる。金沢大学宝町遺跡医学部グラウンド地点は、前述した2地区に属さないため、単独で扱うことにした。

2. 遺跡の位置と地理的環境(第7図)

宝町遺跡は、金沢市の南東部、小立野台地上に位置し、宝町遺跡(医学部附属病院地区)、宝町遺跡医学部グラウンド地点は、金沢市宝町13番1号に、宝町遺跡(医学部保健学科地区)は、金沢市小立野5丁目11番80号に所在する。

小立野は、金沢市内を流れる犀川と浅野川に挟まれた台地であり、更新世後期に形成された河岸段丘である。宝町遺跡の周囲を見渡すと、浅野川方面の北～東側には小立野台地の急峻な斜面が控え、坂を下ると天神町、田井町、旭町に至り、浅野川にぶつかる。それに対し、犀川方面の南～西側は比較的緩やかに下り、笠舞上位段丘、笠舞下位段丘を経て犀川にぶつかる。北西方面には、本遺跡から1.5～2kmほどの地点に兼六園と金沢城がある。兼六園や金沢城は、小立野台地の先端に位置する。

3. 周辺の遺跡と歴史的環境(第7図)

犀川・浅野川の流域およびそれらによって形成された地域には、古来より連綿と人間の営みが続き、それに伴って数多くの遺跡が確認されている。宝町遺跡もその一つであるが、当遺跡が立地するのは、中世末期以降、金沢城を中心に発達した城下町の一角である。

金沢城跡に関しては(財)石川県埋蔵文化財センターが継続的に調査しており、「鋤始の儀式」に関わる刻石や、菱櫓の礎石などが確認されている。また同センターは、特別名勝兼六園内の江戸町跡推定地を発掘調査しているほか、本多家上屋敷跡、木ノ新保遺跡、経王寺遺跡等の調査も行っている。なかでも、宝町遺跡と隣接している経王寺遺跡では、藩主級の人物が葬られたとされる塚が確認されており、出土陶磁器から、17世紀前半と位置づけられている。

上記以外の近世に属する遺跡では、金沢市教育委員会が、瓢箪町遺跡、本町一丁目遺跡、安江町遺跡、下本多町遺跡、木ノ新保遺跡、昭和町遺跡、広坂遺跡等の調査を行っている。

4. 調査の方法と経過

調査区には、公共座標に基づいて、グリッド網を設定した。グリッド網は、調査地区全体を覆うようにし、東西方向にはアルファベットをAから、南北方向には数字を1から付して表記した。グリッド網によって設定された各グリッドの規模は10×10mで、アルファベットと数字の交点ごとに杭を打ち、

その交点名をアルファベットと数字で表したもの(例えば L5)を杭名にし、その杭の南東方向の 10 × 10m のグリッドを、その杭名が及ぶグリッドの名称(例えば L5 区)とした。

遺構は、溝状の遺構やピットなど例外的なものを除いて、暫定的に土坑 1 から順に通し番号を付与した。溝状の遺構に関しては、溝 1 から順に、ピットに関しては各グリッドごとに通し番号を付与した。

遺構は、その形が確認されしだい、先の方法で番号を付し、半截もしくは十字に分割して土層を観察、断面図の作成、写真撮影等を行った。平面図は、航空測量を予定していたため、必要に応じて図面を作成した。図面の作成時における縮尺は、遺構の規模により、1/10、1/20 を使い分けたが、場合によっては 1/40、1/100 で作成した図面もある。

出土遺物は、基本的には層別に、また遺構ごとに取り上げた。さらに遺構に関しては、時間的余裕がある場合に限り、遺構内で分層した覆土ごとに取り上げた。また、特徴ある遺物や残りの良い遺物、一括廃棄と思われる遺物などに関しては、必要に応じて光波測定器を用い、位置、標高、層位を記録し、1 から通し番号を付与して取り上げた。

以上の方法を用い、宝町遺跡(医学部附属病院地区)では、平成 9 ～ 12 年にかけて、病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点、包み込みの森 98 地点、中央設備室地点、病棟Ⅱ地点、精神科病棟Ⅱ地点の調査を行った。

病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点は、平成 9(1997)年 12 月 16 日より発掘調査を開始したが、雨や雪の影響もあり一時中断し、本格的に調査を開始したのは、平成 10(1998)年 2 月 23 日からで、平成 10 年の 3 月 23 日より重機による表土掘削を開始した。5 月 14 日に 1 回目、6 月 30 日に 2 回目、7 月 30 日に 3 回目、8 月 27 日に 4 回目の航空測量を行い、9 月 9 日に発掘調査を終了した。

包み込みの森 98 地点は、平成 10(1998)年 8 月 24 日から重機による表土掘削を行い、8 月 27 日より人力による発掘調査を開始、10 月 30 日に終了した。

中央設備室地点は、平成 10(1998)年 9 月 29 日から重機による表土掘削を行い、翌 30 日から人力による発掘調査を開始、12 月 9 日に航空測量を行い、12 月 16 日に終了した。

病棟Ⅱ地点は、平成 11(1999)年 2 月 15 日より重機による表土掘削を行い、2 月 25 日から人力による発掘調査を開始、3 月 30 日に 1 回目、5 月 24 日に 2 回目、6 月 10 日に 3 回目の航空測量を行い、6 月 23 日に調査を終了した。

精神科病棟Ⅱ地点は、平成 12(2000)年 2 月 23 日から重機による表土掘削を行い、3 月 2 日より人力による発掘調査を開始した。この調査は次年度(平成 12 年度)にまたがるため、概略は次号に掲載することとした。

調査面積は病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点が 6926 ㎡、包み込みの森 98 地点が 361 ㎡、中央設備室が 1220 ㎡、病棟Ⅱ地点が 2630 ㎡である。

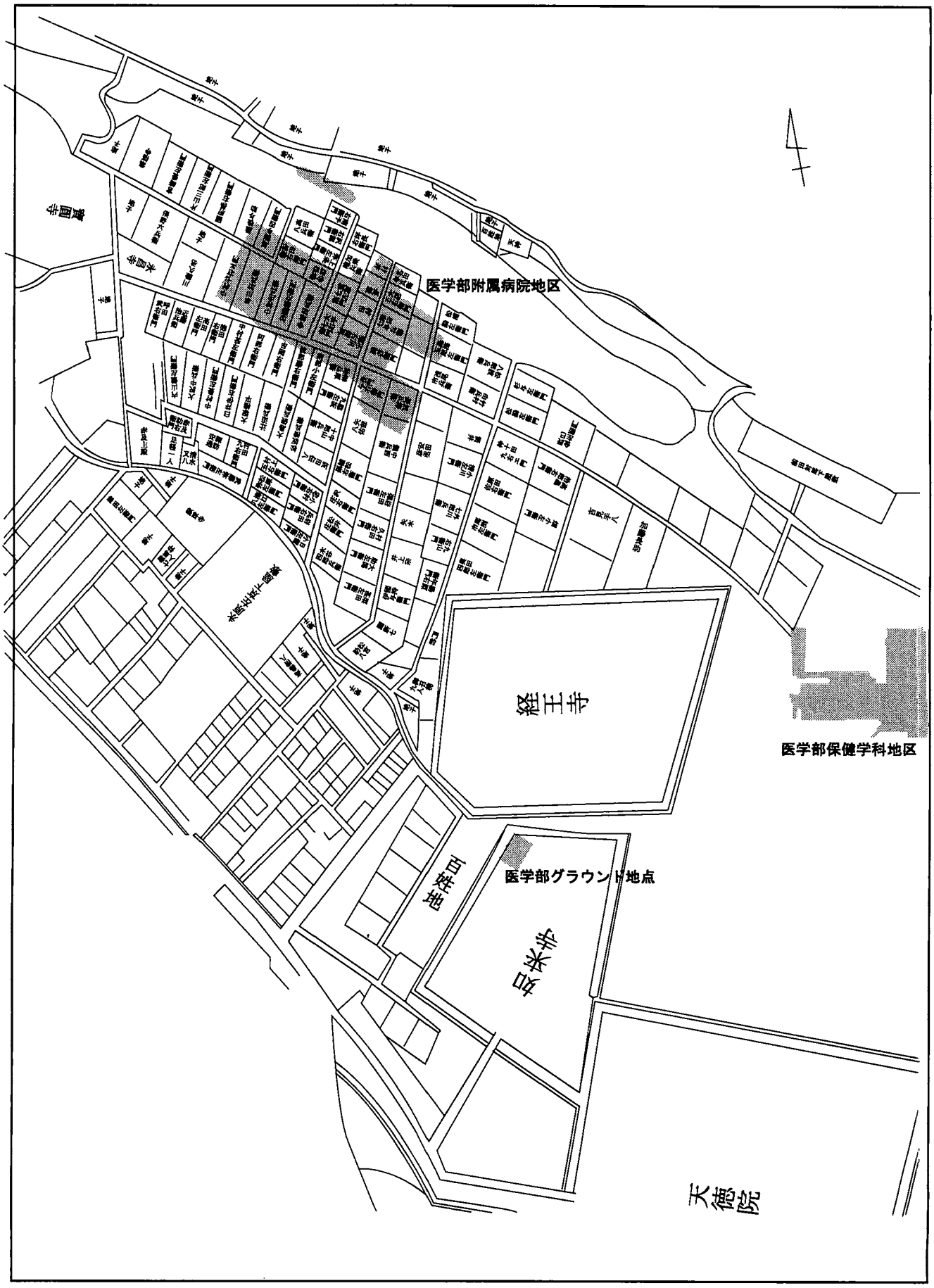
宝町遺跡医学部グラウンド地点では、平成 11(1999)年 8 月 2 日から重機による表土掘削を行い、8 月 4 日から人力による発掘調査を開始、8 月 20 日に調査を終了した。調査面積は 286 ㎡である。

宝町遺跡(医学部保健学科地区)では、平成 10 年から平成 11 年にかけて、校舎Ⅰ地点、校舎Ⅰ基幹整備地点、校舎Ⅱ地点の調査を行った。

校舎Ⅰ地点は、平成 10(1998)年の 5 月 27 日から、重機による表土掘削を行い、6 月 3 日から人力による発掘調査を開始した。10 月 9 日に航空測量を行い、10 月 26 日に調査を終了した。

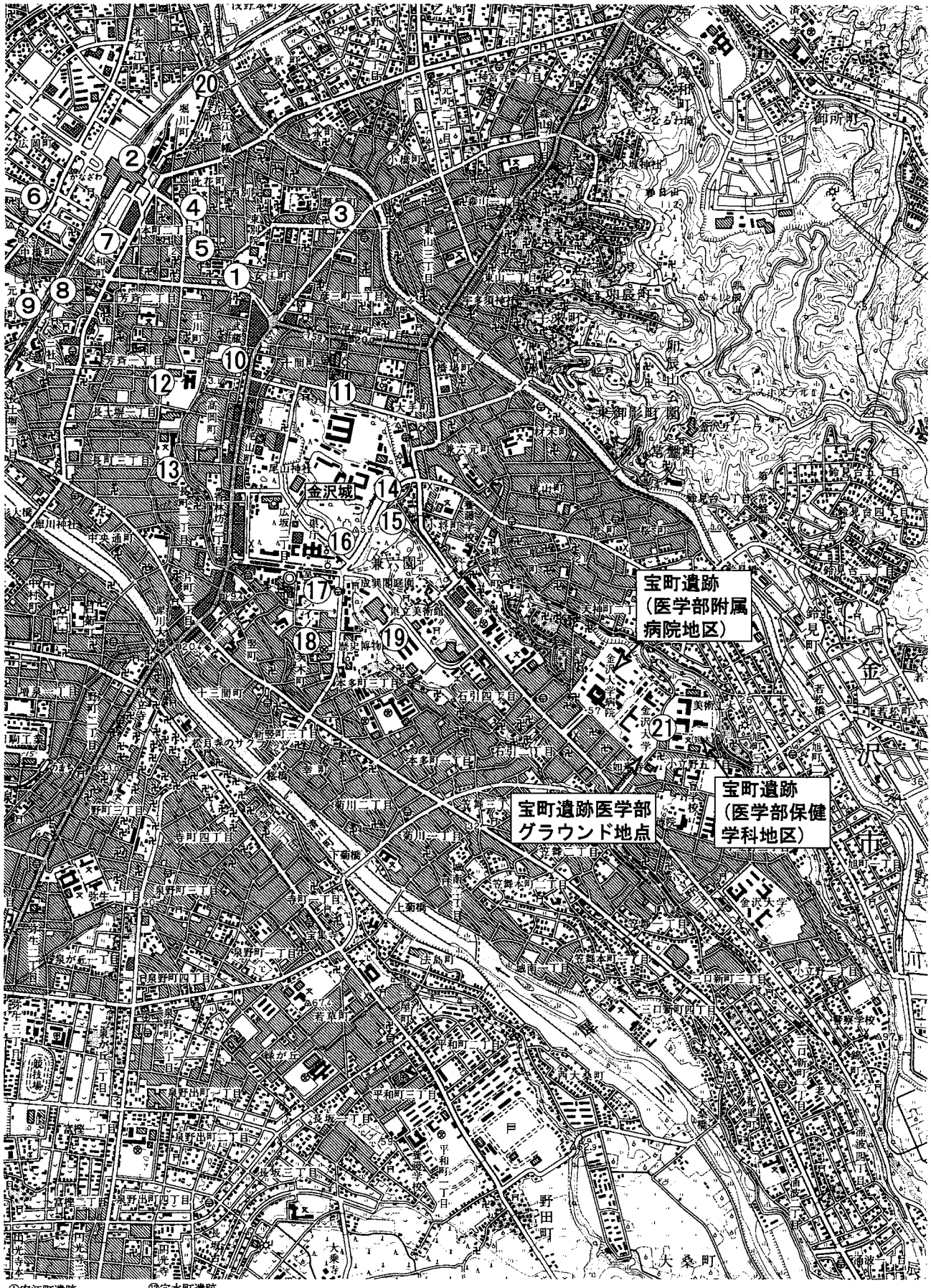
校舎Ⅰ基幹整備・校舎Ⅱ地点は、平成 11(1999)年の 2 月 16 日から重機による表土掘削を行い、2 月 26 日より人力による発掘調査を開始した。4 月 9 日に 1 回目、6 月 25 日に 2 回目の航空測量を行い、6 月 30 日に調査を終了、7 月 1 日に機材の撤収を行った。

調査面積は校舎Ⅰ地点が 2382 ㎡、校舎Ⅰ基幹整備地点が 398 ㎡、校舎Ⅱ地点が 1878 ㎡である。



第5図　延宝金沢図(1673～1680)と宝町遺跡対比図(1/4000)

第6図　金沢城下絵図(天保・安政間)と宝町遺跡対比図　(1/4000)



①安江町遺跡
②木ノ新保遺跡
③甌箕町遺跡
④本町一丁目遺跡
⑤本町一丁目遺跡（第2次）
⑥長田町遺跡
⑦昭和町遺跡
⑧元菊町遺跡
⑨三社町遺跡
⑩高岡町遺跡
⑪大手町遺跡
⑫穴水町遺跡
⑬長町遺跡
⑭石川橋
⑮兼六園（江戸町推定）
⑯車橋門
⑰広坂遺跡
⑱下本多町遺跡
⑲本多上屋敷遺跡
⑳久昌寺遺跡
㉑経王寺遺跡

第7図　宝町遺跡と周辺の城下町遺跡　(1/25000)

金沢大学宝町遺跡(医学部附属病院地区)

1. 調査に至る経緯

本調査は、金沢大学医学部附属病院病棟新営に伴う埋蔵文化財調査である。本調査に先立って、平成9(1997)年5月に金沢大学考古学講座が試掘調査を行った。結果、近世の堆積層・遺構・遺物等が確認された。

2. 調査結果

中世以前

当地区では、縄文時代、弥生時代、古代、中世に属する遺物が確認されているが、近世、近・現代のそれと比べるとその量は僅少であるため、今回の報告では割愛した。

近世(第8図)

中・下級武士の屋敷跡が確認され、近世に作成された絵図と対応させることができた(第5,6図)。具体的には、道跡や屋敷割りに伴う溝跡が確認され、それらが金沢城下絵図(天保・安政間)、延宝絵図と対比できたため、当時のほぼ正確な屋敷割りを絵図と遺構から復元することが可能となった。双方の絵図との対比では、その当時、当地区に居住していた人たちの姓名がわかる(第5,6図)。それぞれの屋敷の敷地内には、多数の廃棄坑、植栽痕をはじめ、地下室、井戸、炉跡、貯蔵庫跡などが確認された。今後の整理作業により、当時の当該地における土地利用状況を、ある程度復元することが可能になろう。

現在までに確認されている遺構は、土坑 1060(うち井戸26, 地下室22, 炉跡10, 貯蔵庫跡10, 門柱痕3, 土取穴跡10, 廃棄坑・植栽痕多数)、溝87、集石遺構7、ピット357、建物跡、道跡などである。これらは、現在までに確認された遺構であり、今後の整理作業によって、その数の増減があることを断っておく。

遺構

廃棄坑

廃棄坑は、大小さまざまに多数確認された。現在、整理作業中であり、正確な遺構数を提示することはできないが、最終的には数百基を数えると思われる。

ここで廃棄坑とした遺構は、当初からゴミ等を廃棄するために構築されたと判断されるものである。よって、地下室や井戸として構築された遺構が、最終的にゴミ等を廃棄する穴として利用された場合は、廃棄坑とはみなさない。

廃棄坑の多くは屋敷境に沿う格好で集中するという傾向が見いだせる。今後、出土遺物や重複する遺構関係から当時の土地利用を把握していきたい。

井戸(第15図)

井戸は26基確認されたが、作業上の安全を考慮して、調査を中断したものがほとんどで、土坑522のみ底を確認した。井戸の各部名称については、「井戸考」(宇野 隆夫 1982「井戸考」『史林』65巻5号 pp.1-39)に準拠した。宇野氏は、水を汲む人の安全をはかり、汚水の流入を防ぐため地上に設ける部分を井桁、井壁の崩壊を防ぐため地下壁面に設ける部分を井戸側、湧水を溜めるため底に設ける部分

を水溜と呼称している。

26 基の井戸のうち、確実に井桁を伴った状態で確認されたものはない。しかし数基の井戸や土坑からは井桁の破片と思われる加工された石が出土しているため、いくつかの井戸には、石製の井桁が存在したことが窺える。石製以外の井桁には木製が想定されるが、木製井桁の存在を裏付ける遺物の出土は確認されていない。

井戸側の構造は、現在のところ 2 種類確認している。1)素掘りのものと 2)地面を掘り込んで数段の石を積み、井壁を保護しているものである。1)類とした井戸のなかには、井戸側に積んだ石が抜き取られた可能性が考えられるが、井壁に抜き取りの痕跡が確認できなかったことから、井戸がつくられた当初から素掘りであったととらえている。2)類は 9 基ほど確認された。井戸側の石積みは、おおむね地山とした黄褐色粘質土までで、その下層にある礫層には石積みはなされない。つまり井戸側に設けられた数段の石積みは、黄褐色粘質土の地山の崩落を防ぎ、井桁の土台も兼ねたものと推測できる。井戸側に積まれている石は面取りしてあるものと、そうでないものとがある。

今回掲載した井戸は 4 基で、土坑 120, 395, 425, 639(第 15 図)である。

土坑 120 は、2)類の石積み井戸と思われるが、大部分の石は既に抜き取られていた。井戸側上部は漏斗状に一回り掘り込みを拡大している。井桁は井戸内で確認された石製井桁片の出土から、石製の井桁であったことが推測される。また井戸枠上部の北西部分には、根石と思われる扁平な石を伴う円形ピットが確認されたことから、この井戸には釣瓶などを垂らすために上屋がつくられていたことが想定できる。水溜は確認できなかったが、湧水レベルは標高 52.5m である。

土坑 395 は、一部分にだけ石が積んである特殊な井戸である。この土坑 395 は、地下室である土坑 473 を切っており、切り合いが重なる部分にだけ石が積まれており、切り合っていない箇所は素掘りのままで地山がそのまま露出した状態であった。つまり、この井戸を掘った当初は素掘りの井戸にする計画だったが、掘り進めていくと地下室である土坑 473 の一部分に当たることがわかったため、その部分に石積みを施して、地下室である土坑 473 の軟弱な覆土が崩落などして井戸内に落ちたり、流れ込まないように補強したものと考えられる。

土坑 425 は 2)類の石積み井戸である。この井戸も井戸側上部で掘り込みを拡大し、そこに一カ所を面取りした石が最多で 6 段積んだ状態で確認された。水溜は確認できなかったが、湧水レベルは標高 53.3m である。

土坑 639 は 2)類の石積み井戸である。土坑 425 と同じタイプで、一カ所を面取りした石を井戸側上部に積んだ状態が確認された。攪乱によって部分的にしか石積みが確認されなかった。石積みの裏の 3・4 層には裏込め土が充填されていた。井戸内には、煤の付着した礫や加工された石、陶磁器などがぎっしりと詰まっていた。これは、この付近で火災があったことを示唆しており、この井戸がその火災時のゴミの廃棄坑として使用されたことが推測できる。おびただしい石に混じって、側面と裏面に「矢部金次」と釘書きされた石製硯が確認された(第 23 図 No.167)。土坑 639 は金沢城下絵図(天保・安政間)では「矢部家」の敷地内に位置しており(第 8,10 図)、この硯の出土によって、この場所が矢部家の敷地であったことが裏付けられた。よって井戸には矢部家の火災ゴミが一括廃棄されている可能性が高い。出土遺物は、被熱したものが多く、一部 17 世紀に属するものもあるが、おおむね 19 世紀に属する遺物であり、火災の時期は 19 世紀と推定することができる。

便所跡(第 16 図)

現時点において、便所跡と思われる遺構は 9 基存在する。しかし、確実なものは極わずかであり、今

後十分な検討が必要である。その中でも土坑 882 は確実に便所跡と認められるものである。

土坑 882（第 16 図）は、便槽設置のための掘り込みと思われるが、桶、樽、土器、陶器などの便槽の痕跡は確認されなかった。。下層からは、粘性が強くて非常に軟らかく、かつ尋常ではない臭気を発する堆積が確認された。つまり、当時の糞尿の堆積がそのままパックされて残っていたということである。糞尿内には木屑も混じって残存していた。糞尿除去後、土坑底の礫層の地山（12 層）が白く変色しているのが確認された。川口宏海氏は、「遺構が便槽であったかどうかの判定の手掛かりとなるのは、壁面にしばしば付着している白色の物質で、糞尿に含まれるカルシウム分が付着したものと理解されている」（川口宏海 1991「中・近世における便所遺構」『近世都市の構造』関西近世考古学研究会 pp.150-169 の p.150）と述べている。土坑 882 の地山の白色化も川口氏の述べているように、カルシウム分の付着した状態を示していると思われる。桶か樽が設置してあった場合は、桶か樽内のしみ出た糞尿のカルシウム分が地山に付着して白色化したものと考えられ、桶か樽が設置されていなかった場合は、糞尿のカルシウム分がそのまま地山に付着したものと考えられる。

糞尿中にはさまざまな種子も混在していた。これは、肥料としての糞尿の利用価値を高めるために、わざわざ便所に生ゴミを廃棄した結果（前川要 1999「便所遺構からみた中世都市と社会構造」『歴史評論』No.590 pp.18-44 の p.25）とも考えられる。

便槽内から出土した特筆すべき遺物は、「金城／文化／年製」と 3 行に分けて書かれた裏銘をもつ染付碗である（第 17 図 No.17）。この染付碗は金沢市安江町遺跡で出土したものと全く同種である。「この銘（金城／文化／年製）は再興九谷の春日山窯（青木木米開窯）の製品にのみみられるもので、松本佐太郎氏が 1940 年に著した『定本 九谷』（寶雲舎版）によれば「金城／文化／年製」と 3 行に分けて書かれる銘は、木米が金沢を去った（文化 5 年　1808 年）後使用されるということである。よって、この便所が廃絶された時期は 19 世紀前半頃ということができる。春日山窯の製品が発掘資料によって確認されたのは今のところ 1 点のみである。」（金沢市・金沢市教育委員会 1997『安江町遺跡』p.6）。土坑 882 で出土した製品は『安江町遺跡』で確認されたものと図柄などまったく同じである。ちなみに、第 18 図 No.35 も春日山窯の製品であり、土坑 142 から出土した色絵小碗で、高台裏に「金城／製」と 2 行に分けて銘が書かれている。

この便所は、金沢城下絵図（天保・安政間）では、内藤家の屋敷地裏境あるいは堀家の屋敷地横境に配置してあったようである（第 8,10 図）。中・下級武士の屋敷地内の便所がどこに設置してあったかという当時の空間利用状況を把握していくうえでも興味深い事例である。

門柱の根石（第 16 図）

門跡と考えられる遺構は現在のところ、確実なものとして 2 カ所確認されている。I10 礎石 1 と I9 礎石 1、V14 礎石 1 と V14 礎石 2 である。それぞれ 1 対の門柱の根石である。I10 礎石 1 と I9 礎石 1（第 16 図）は、石の中心から中心まで約 180cm（1 間）である。掘り込みの平面形態は隅丸方形で、深さ 40 ～ 50cm、その底に 20 ～ 30cm の門柱の根石となる平坦な河原石を置く。4 層は柱痕と思われる。その規模から木戸門程度と想定され、金沢城下絵図（天保・安政間）では、内藤家の門にあたる（第 8,10 図）。

貯蔵庫跡（第 16 図）

地下室のように明瞭な天井部をもたないが、その用途が貯蔵施設と推定される遺構を貯蔵庫跡としている。現時点において 10 基ほど確認しているが、確実なものとして土坑 452（第 16 図）を挙げた。土坑 452 は、最終的に廃棄坑として使用されたらしく遺物も多い。2 層からは、「文政四辛巳七月」（1821

年7月）と外面底部に墨書された小甕が出土した（第21図No.110）。

地下室（第12,13,14図）

地下室は、入口部とそれよりも大きい室部からなるものを地下室と判断した。現時点で22基確認しており、その細分類は、入口部・室部の平面形及び位置関係をⅠ～Ⅵ種とし、断面形をA～Eとして、その組み合わせで分類を行っている（第12図）。

土坑473（第13図）は、Ⅰ-A1種に分類される。スロープ状の入口部を有し、傾斜角約11°で室部に至る。前述したように土坑395（井戸）にスロープ部と室部を切られる。室部に至る直前のスロープ部に3つの段差があり、階段の可能性もあるが確証はない。ただ、段差部分の両壁際をえぐるように掘り込まれた穴が確認されたため、丸太などを穴から穴へ渡し、簡単な階段をつくっていた可能性がある。スロープ部と室部のちょうど境目に30×40cmの加工された石が確認されたが、この石の用途は現在のところ不明である。

土坑373（第13図）は、Ⅰ-A2種に分類される。土坑373は、入口部から室部に至るアクセス部分は石と土から成る階段で、傾斜角約45°で室部に至る。室部には2辺にL字形に棚部が設けられる。遺構上部には煉瓦基礎の7号建物が建てられているが、天井部は崩れていない。本遺跡が立地する小立野台地の地山の強固さが窺え、先に述べたように、素掘りの井戸が多いことの一要因と言える。

土坑526（第13図）は、Ⅱ-B2種に分類される地下室である。傾斜した天井部を有し、床面は約50cmの段差で2段に分かれている。南西壁面には、形は悪いが抉り込みが設けられており、灯明皿などの灯り置きではないかと推測できる。

土坑184（第13図）は、Ⅲ-B1種である。室部床面から天井部まで約70cmと狭く、非常に小規模なもので地下室とは呼べないかもしれない。

土坑799（第13図）は、Ⅱ-B2種である。入口部が漏斗状にすぼまり、北西方向に天井部を造る。室部底部は段差が1つ設けられており、天井部方向が一段高くなる。段差は20cm程度である。入口部から室部へ至るには幅が80～100cmしかない非常に狭い部分を通らなくてはならない。現代人よりも小さかった当時の人のサイズにあわせてあるものと思われる。地下室内には、井戸などに使用されたと思われる面取りされた河原石が混じり、底部近くでは加工された石製品が破損した状態で相当量確認された。この石製品の用途は正確には判らない。

土坑76（第14図）と土坑416（第14図）は、Ⅳ-C種である。土坑76の6層は、灰色粘土中に瓦、その下に樹皮状の炭化物が層状に堆積していた層であり、地下室機能時の除湿用の床面構築土と考えられる。土坑416は、灯り置きに使用したと思われる棚部を2カ所に設けてある。床面から漆器と思われる有機物が確認された。

土坑1015（第14図）は、Ⅱ-C種の地下室である。現在の植栽の掘り込みに上部を壊されていた。覆土から遺物の出土はほとんど無く、一気に埋められた状況を呈している。

土坑870（第14図）は、Ⅱ-B2種である。近世の整地層である第4層を掘り込んでつくられている。明確な天井部をもたず、入口部から室部に向かって緩やかに拡がっていく。地下室として使用されなくなった後は廃棄坑として利用されたようである。覆土には貝殻が混じっていた。

土坑299（第14図）は、Ⅵ-E種である。室部は不定形のL字形で、発見された地下室の中で最大規模である。

土坑9（第14図）は、Ⅴ-D種に分類され、断面フラスコ状の地下室である。7・8層には、粘質土に石が多く入り、近世遺物に混じって縄文・弥生時代に属すると思われる石斧も確認された。また最下層の8

層から少量の繊維質の有機物と、桃と思われる種子が出土した。

土坑 629(第 14 図)は、Ⅱ-B1 種である。室部には比較的規模の大きな棚部が 2 カ所に設置される。1 層には人頭大の河原石が充填されており、覆土は僅かしかなかった。

現時点において、当地区の地下室の長軸は、北から東（右）回りに 32°～38°と 121°～134°と 2 つにグルーピングされることが判明している。当地区の道跡や、門跡の軸から算出した屋敷割りの軸は、北から東回りで 37°と 124°である。地下室の軸と屋敷割りの軸がほぼ同じ方向性を示していることから、当地区の地下室は、常に屋敷割りを意識して造られたと言える。

道 1

道 1 は、北東－南西に走る、幅 4.2m の道である。病棟Ⅱ地点では、石を 2 列平行に並べてつくった排水溝と思われる溝 72(第 8 図の溝 72)や、突き固められたと思われる薄い硬化面が数枚確認された（第 8 図の道 1 部分)。溝 72 と道の硬化面上に、煉瓦基礎の 1 号建物が建てられているため、、1 号建物の建設着工時まで道が残っていた可能性が高い。道 1 と同様の硬化面は、1997 ～ 98 年に行われた配管に伴う発掘調査(第 2 図の G2)でも確認されているが、調査面積が非常に狭かったため、溝は確認できなかった。上記以外では、硬化面は確認できなかったが、溝が 2 本平行に発見されたため道と同定できた箇所もある(道 2・3 など)。

炉跡(第 16 図)

土坑 806 ～ 808(第 16 図)は 3 連の炉で、竈設置に伴う掘り込みと推定される。土坑 806 の中心部分には焼土が大量に堆積しており、焼けた石が 2 個確認された。土坑 807 は隣接する切り株によって攪乱を受けているが、堆積土には焼土と炭化物が確認された。土坑 808 の堆積土にも、焼土や炭化物が含まれ、焼けた石も 1 個確認された。この炉跡周辺には、土間のように硬い部分も確認されており、ここが台所として利用されていたことを窺わせる。

建物跡

現在、建物跡と想定している箇所は 2 ～ 3 あるが、その 1 つを第 8 図に掲載した。病棟Ⅱ地点で確認されたもので、栗石基礎がほぼ 1 間（180cm）間隔で並ぶと思われるが、栗石基礎をすべて確認できなかったため、当時の建物範囲を正確に復元するには至らない。軸は道跡や地下室とほぼ同じである。

他にも、土取穴、植栽痕など多数の遺構が確認されたが、詳細は本報告に譲りたい。

遺物(第 17 図～第 23 図)

遺物は、17 世紀から 19 世紀までと幅広く出土しているが、18 世紀に属するものが主体をなす。その種類は、陶磁器、土器、金属製品、石製品、木製品である。磁器は、肥前系が最も多く、それ以外に瀬戸・美濃系、九谷系、中国青花などが確認されている。陶器は、肥前系、京・信楽系、瀬戸・美濃系、九谷系、万古、越前、須佐唐津、越中瀬戸などが確認されている。炻器は備前が確認されている。

近・現代(第 9 図)

当地区では、石川県金澤病院が明治 34 年に着工されて以来、病院に関わる多くの建物や施設が建築・改築・解体されてきた。今回の調査では、発掘調査が始まる前まで存続していた建物から、すでに解

体され埋められていた病棟の基礎、それに伴う土管列や集水桝、近代遺構などが数多く確認された。遺物は、病院内で使用された食器や医療道具(注射器やビーカー、刃物など)、瓦や煉瓦、使用後の石炭など多岐にわたる。

遺構

建物跡(第 9,11 図)

近代の建物跡は 21 棟確認された。以下、主要なものについて概観する。

1 号建物、5 号建物、7 号建物、12 号建物は、下から栗石、砂利コンクリート、煉瓦及び凝灰岩（凝灰岩を用いるのは 1・5 号建物）の基礎をもつ建物である。

1 号建物は、病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ, 病棟Ⅱ, 中央設備室地点を北西－南東にのびる建物跡である。昭和 6 年の「金沢醫科大學及附属醫院平面配置圖」と遺跡を対比させた第 11 図をみると、昭和 6 年当時は、北西から南東へ向かって、内科南病室、内外科病室、外科南病室が配置されていたのがわかる。21 号建物は、1 号建物の南東端から渡り廊下で連結された便所跡である。便所甕から昭和 17 年銘の五銭硬貨が出土している。1 号建物東側と 21 号建物は、昭和 13 年の建物配置図には描かれているが、昭和 24 年の建物配置図には描かれていない。『医学部百年史年表』には、昭和 20 年 8 月に焼夷弾による類焼をふせぐため、附属病院と大学校舎の一割を取り壊したという記述があるため、21 号建物の取り壊し時期がそれにあたるのではないかと思われる。5 号建物は、1 号建物の北東に位置し、1 号建物と平行に並んで位置している。1 号建物のほうが 5 号建物より長く規模が大きい。同じく昭和 6 年の「金沢醫科大學及附属醫院平面配置圖」から、北西から南東へ向かって、内科北病室、精神科病室、外科北病室が配置されていたのがわかる。5 号建物は、明治 38 年に竣工された。

近代遺構(第 9 図)

近代遺構は、近世よりも後の時代に属すると判断される遺構についての呼称である。現在までに 135 基を確認しており、病院に関わる遺構が多い。その種類は、廃棄坑、コンクリート製の階段地下道遺構、甕を埋設した便所遺構、電柱とその掘り込みなど多種多様である。廃棄坑には、病院食器を廃棄した穴、煉瓦・瓦などを廃棄した穴、注射針や獣骨を埋めた穴などがある。

病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点で発見された近代遺構 12 は、長方形のコンクリート枠内に階段が両端に設置されており、地下に潜り、また地上に出られる構造の施設である。昭和 6 年当時の図面では、この近代遺構 12 の上を渡り廊下が通っている。この図面から、近代遺構 12 が渡り廊下によって阻まれた両側の区域を行き来するための半地下道施設であることがわかった。病棟Ⅱ地点でも同様の施設(近代遺構 132)が確認されている。

遺物(第 24 図)

第 24 図は、病院で使用された硬質陶器及び磁器である。「金澤大學」や「金澤大学醫院」「金大病院」、「金澤病院賄」、「金澤病院賄用」、「附属醫院」とスタンプされており、病院で使用されていたことが判る。またそれらに混じって、皿内面中央に「魚半」と朱で書かれた磁器が確認された(第 24 図 No.185)。「魚半」は、現在でも金沢市にある料理屋「魚半」のことを指し示していると思われる。病院が仕出しを頼んでいたのであろうか。

第 24 図 No.193 は、近代の陶器徳利である。外面胴部に店の屋号や電話番号などが鉄釉で書かれている。この酒屋は、本遺跡の近く、金沢市石引 2 丁目 8-3 で現在も営業をしている酒造メーカー名であり、

「子三一五三」は、当時の電話番号である。北陸最初の電話交換事務開始は、明治 34 年 3 月、金沢電話交換局においてであり（日本電信電話公社北陸電気通信局 昭和 39 年『北陸の電信電話 その九十年の歩み』p.47)、この徳利は明治 34 年 3 月以降に使用されたものであることがわかる。

金沢大学医学部附属病院沿革

1862（文久 2）年 3 月　加賀藩金澤彦三、八番丁に種痘所（反求舎）をつくる。

1864（元治 1）年　南町に移転。金澤藩種痘所となる。

1867（慶応 3）年 10 月　卯辰山養生所（病院部門）完成。医学館、薬圃を附す。

1870（明治 3）年 2 月　大手町に藩立医学館設置。附属病院を一般患者の治療所。卯辰山治療所を卯辰山貧病院と改める。

1871（明治 4）年 7 月 廃藩置県で金澤藩改め金澤県。金澤藩医学館を金澤県医学館に改称。

1872（明治 5）年 2 月　金澤県を石川県と改称。学制改革により藩以来の公立学校の廃止決定。4 月医学館閉鎖。私立病院として教育、診療を継続。

1873（明治 6）年 3 月　石川県と金澤町の補助をうけ医学館半公立となる。文部省より医学館を金澤病院と命名通達。9 月開院式。

1875（明治 8）年 8 月　県に移管。石川県金澤病院となる。

1876（明治 9）年 8 月　石川県金澤病院から石川県金澤医学所分離。〈学校と病院の分離〉

1879（明治 12）年 11 月　金澤病院殿町移転。旧病院は医学所が使用。

1887（明治 20）年 8 月　4 月開設の第四高等中学校に医学部設置。

1888（明治 21）年 4 月　開学。

1892（明治 25）年 4 月　医学部仙石町に新築移転。実習は金澤病院。〈国立学校と県立病院の併存〉

1894（明治 27）年 7 月　高等学校令により第四高等学校医学部となる。

1901（明治 34）年 4 月　医学部独立して金澤医学専門学校と称す。小立野に石川県金澤病院着工。

1905（明治 38）年 8 月　新築移転完了。業務開始。

1910（明治 43）年 4 月　小立野に金澤医学専門学校建設着工。

1912（明治 45）年 7 月 金澤医学専門学校小立野移転。

1922（大正 11）年 4 月　石川県金沢病院官立移管、金沢医学専門学校附属医院に。12 月　附属病院が給食開始。

1923（大正 12）年 4 月　金沢医科大学設立に伴い、金沢医学専門学校附属医院は金沢医科大学付属医院となる。

1928（昭和 3）年 5 月　付属薬学専門部教室、同危険薬品庫、付属医院内外科学生診察室、皮膚科診察室、眼科、小児科研究室、耳鼻咽喉科手術室、小児科、伝染病室、外科日光浴室竣工。

1929（昭和 4）年 7 月　精神科病室竣工。

1935（昭和 10）年 4 月　第六病棟半分、大里内科（第二内科）竣工。12 月細菌検査部門室竣工。

1938（昭和 13）年 1 月　第六病棟残り半分、石川外科（第一外科）竣工。

1942（昭和 17）年 3 月　結核研究所設置。

1945（昭和 20）年 8 月　附属病院と大学校舎の一割を壊す。

1949（昭和 24）年 5 月金沢医科大学附属医院を金沢大学医学部附属病院に改称。

1956（昭和 31）年 7 月　第三病棟竣工。

1959（昭和 34）年 3 月　中央診療棟、第三病棟廊下竣工。〈32 年 9 月着工〉

1961（昭和 36）年 4 月　がん研、手術部設置。

1962（昭和 37）年 6 月　第二病棟、厨房新築着工。

1963（昭和 38）年 7 月　十全講堂（百年記念講堂）竣工。8 月医学部校舎新築。

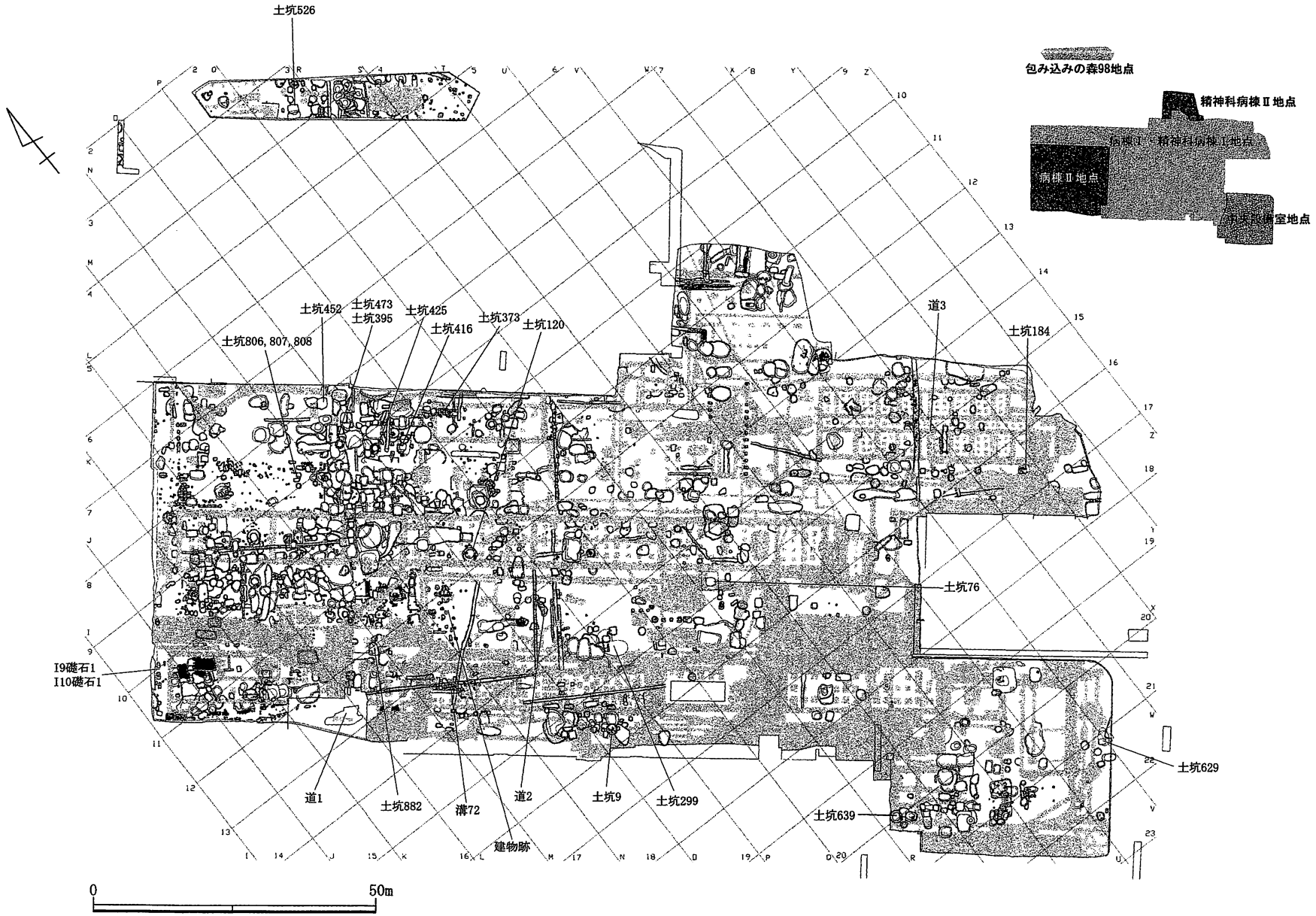
1964（昭和 39）年 3 月　アイソトープ隔離病棟、附属病院麻酔部設置。

1966（昭和 41）年 11 月　医学部実験研究棟、解剖棟新築完了。

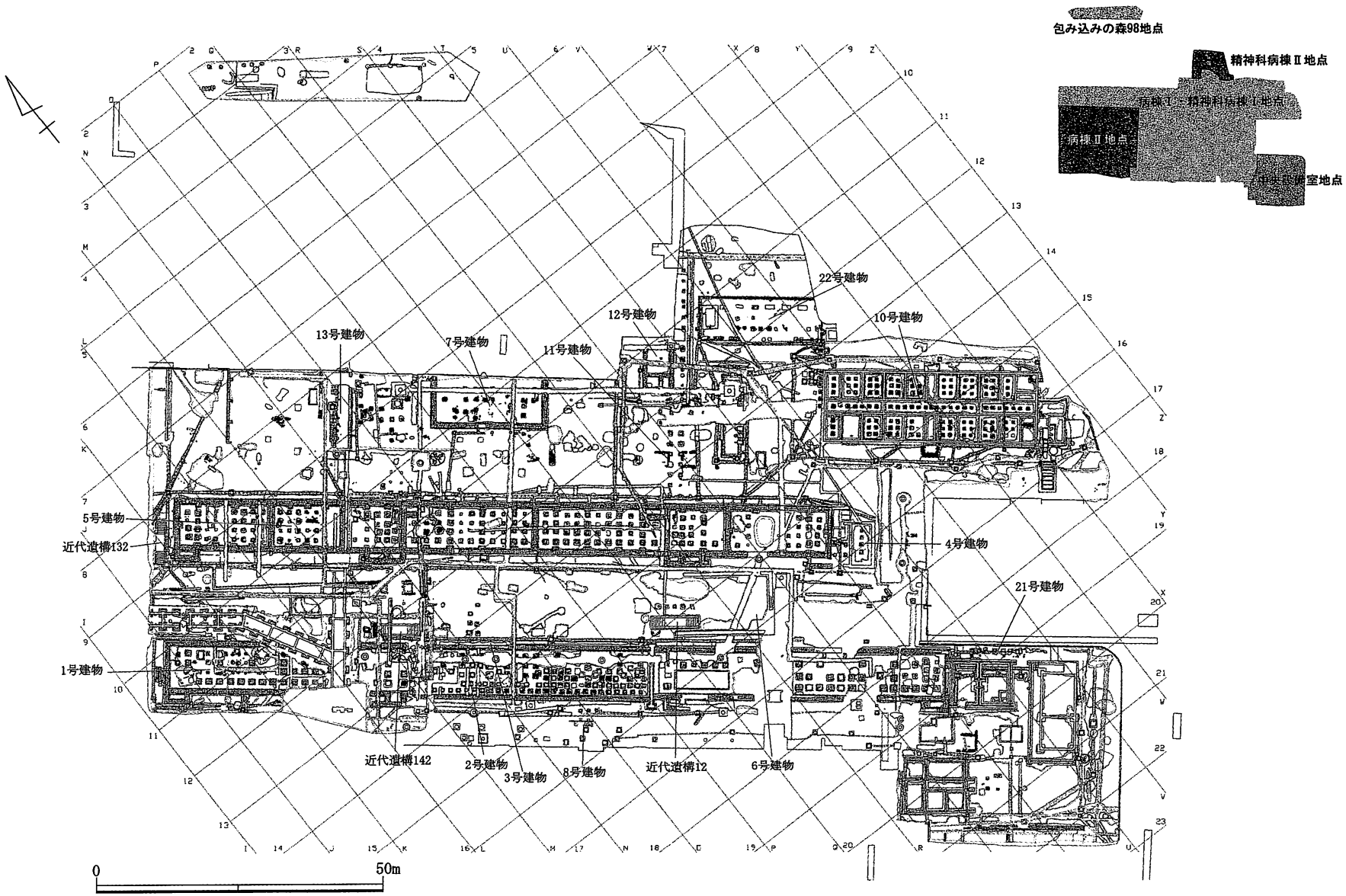
1967（昭和 42）年 5 月　動物焼却炉竣工、神経情報研究施設設置。11 月病院臨床棟、管理棟新築完了。

1968（昭和 43）年 12 月　医学部校舎竣工。

1971（昭和 46）年 3 月　臨床講義棟新築完了。

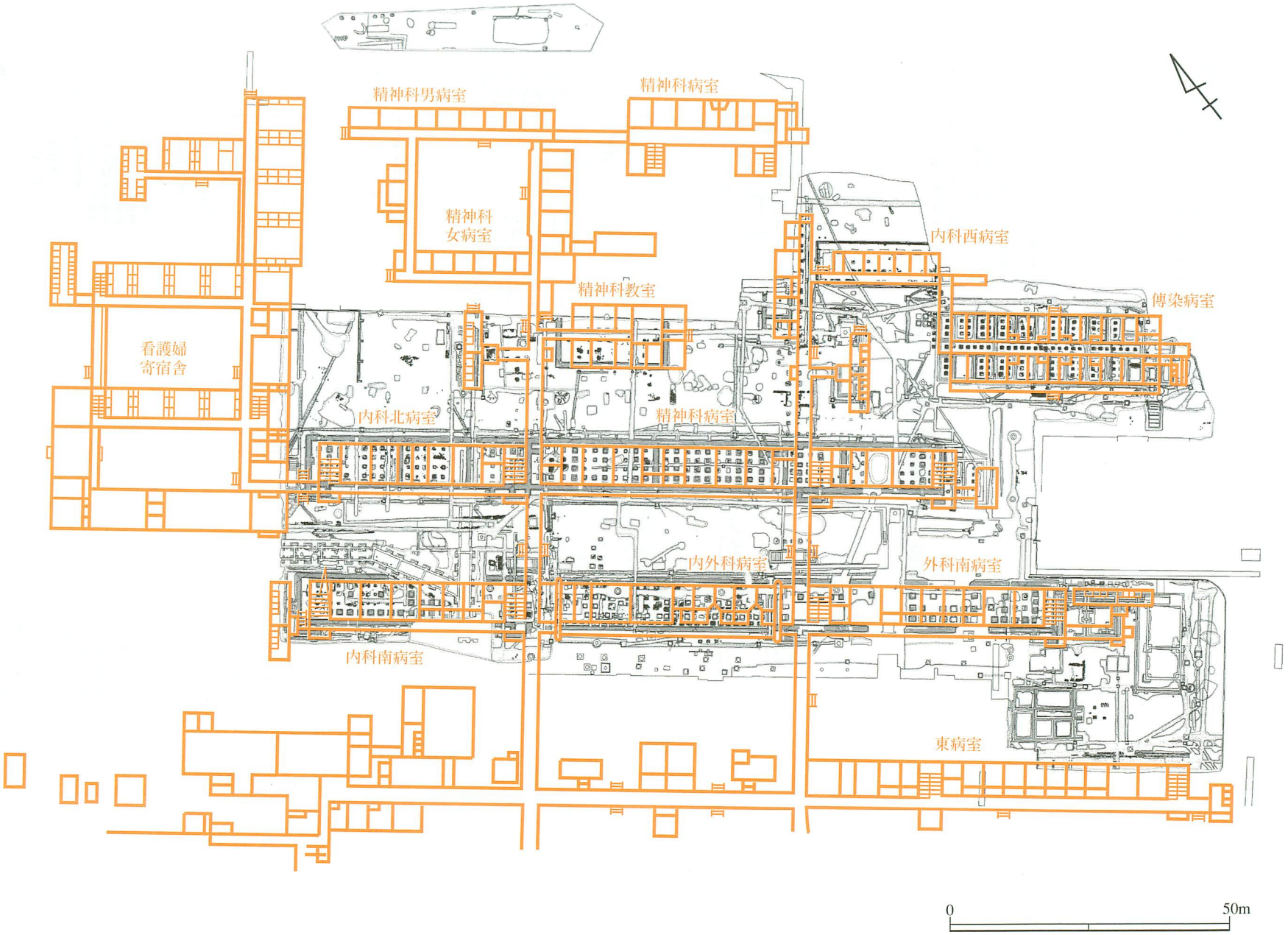


第8図　宝町遺跡（医学部附属病院地区）　近世　(1/1000)

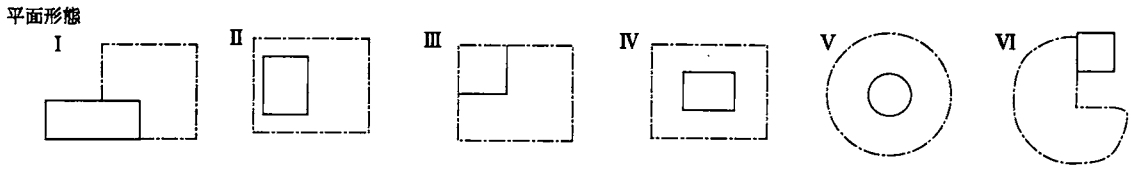


第9図　宝町遺跡（医学部附属病院地区）　近・現代　(1/1000)

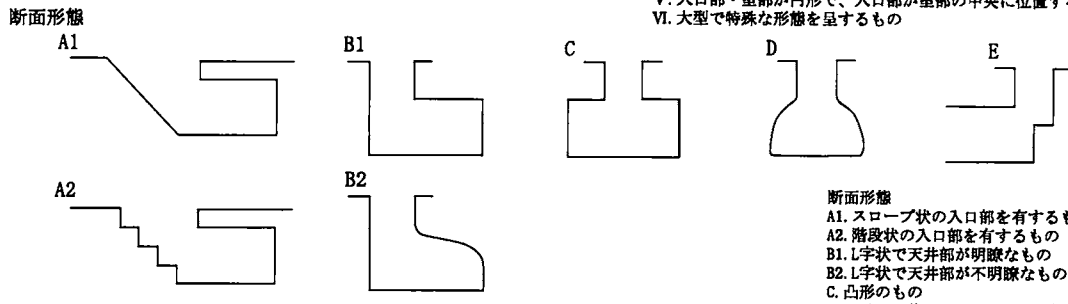
第10図　金沢城下絵図(天保・安政間)と宝町遺跡(医学部附属病院地区)　(1/1000)



第11図　附属病院平面配置図(昭和6年当時)と宝町遺跡(医学部附属病院地区)　(1/1000)

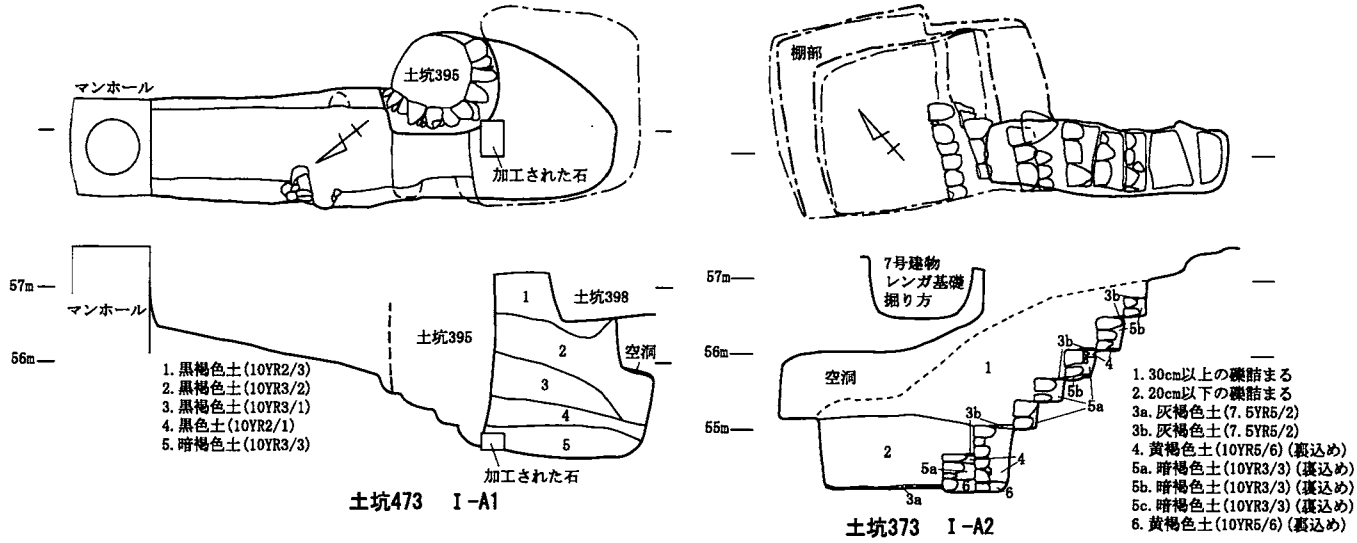


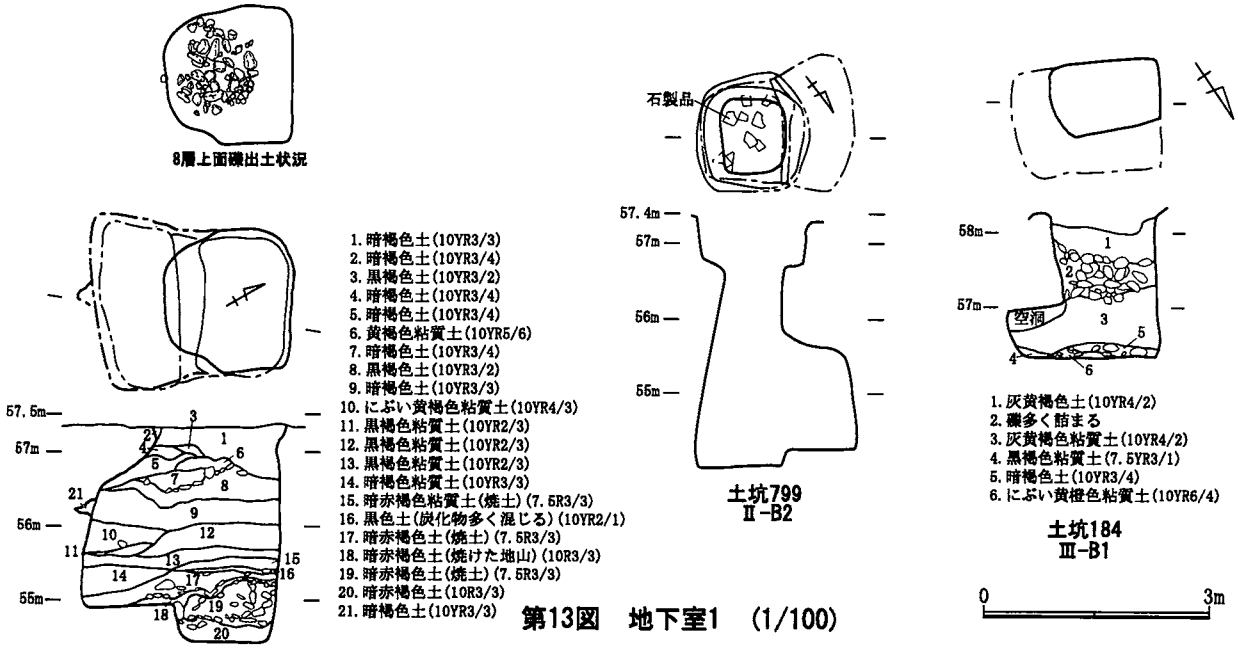
平面形態
I. 入口部が長細い長方形状、室部が方形を呈し、入口部が室部に接続するもの
II. 入口部・室部が方形で、入口部が室部の1辺に接するか近い位置にあるもの
III. 入口部・室部が方形で、入口部が室部の2片に接するか近い位置にあるもの
IV. 入口部・室部が方形で、入口部が室部の中央に位置するもの
V. 入口部・室部が円形で、入口部が室部の中央に位置するもの
VI. 大型で特殊な形態を呈するもの



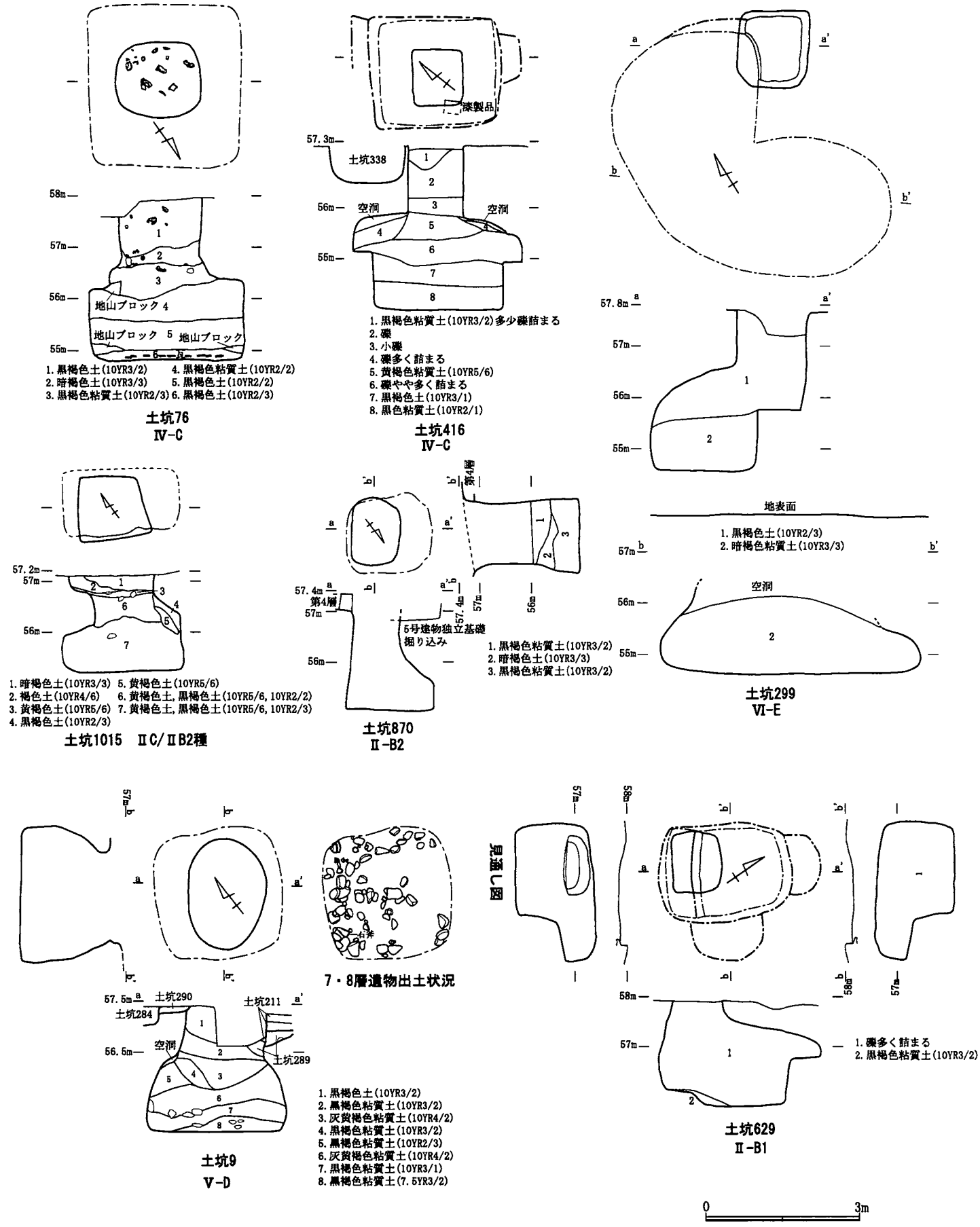
断面形態
A1. スロープ状の入口部を有するもの
A2. 階段状の入口部を有するもの
B1. L字状で天井部が明瞭なもの
B2. L字状で天井部が不明瞭なもの
C. 凸形のもの
D. フラスコ状で、Cのように明確な天井部をもたないもの
E. 入口部と室部が食い違ったもの

第12図　地下室形態分類模式図

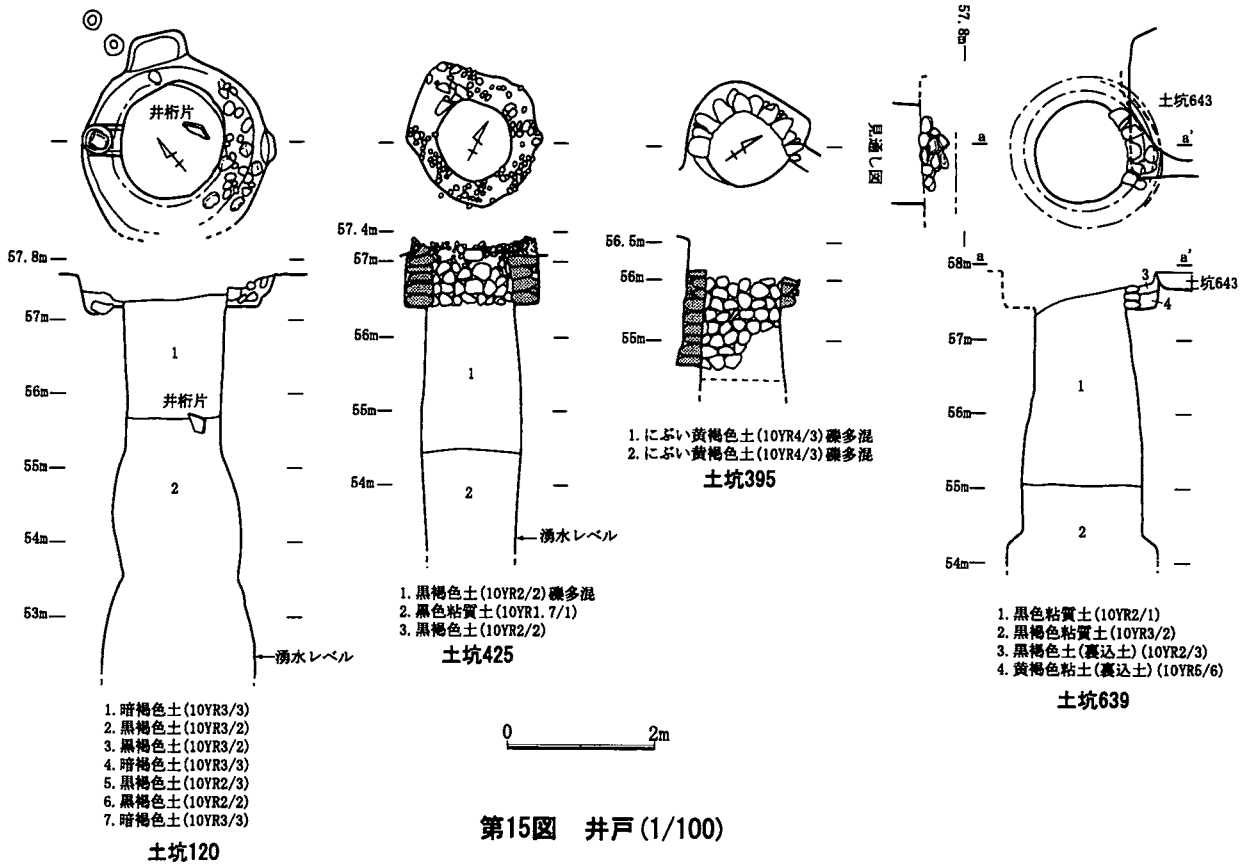




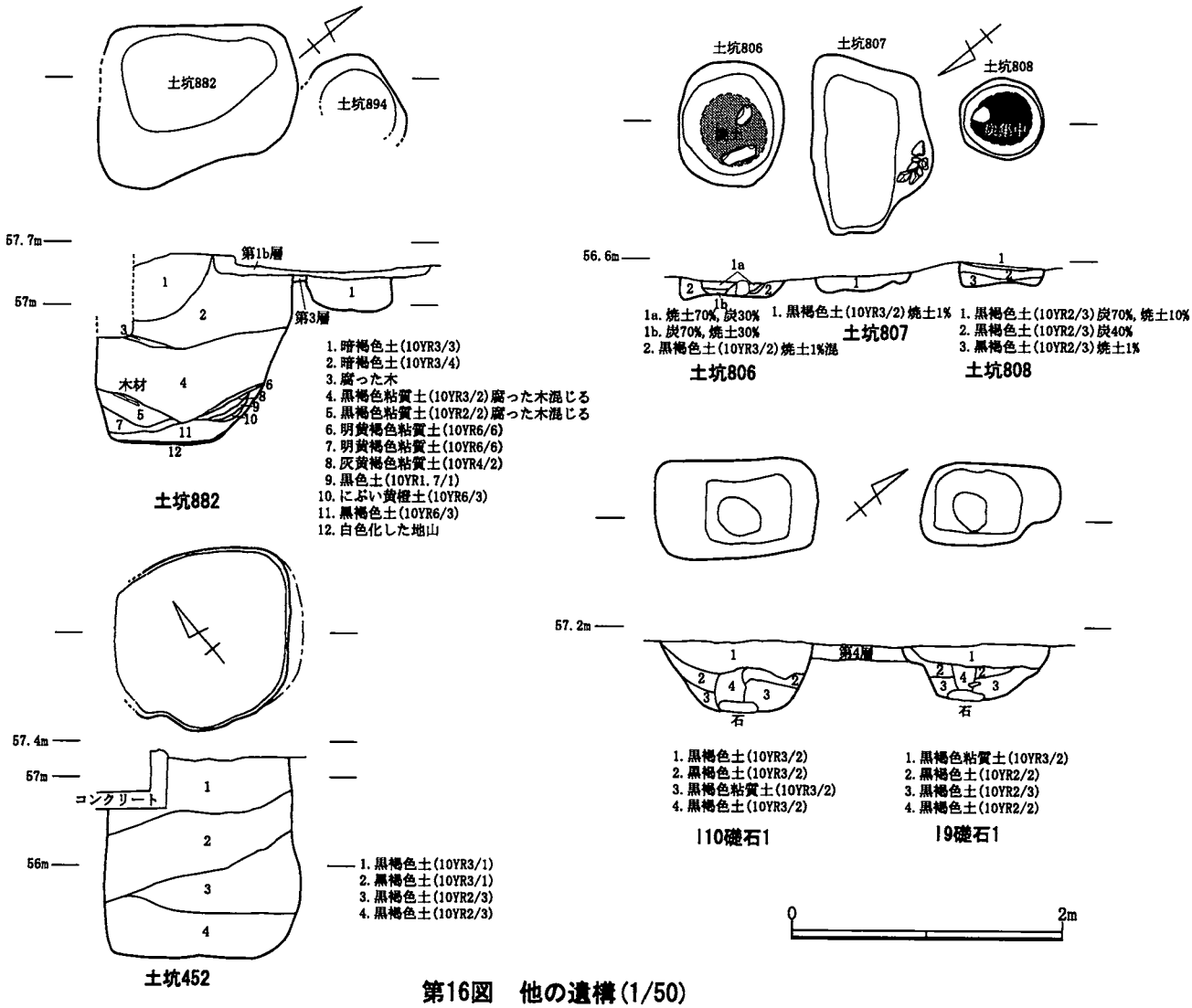
第13図　地下室1　(1/100)



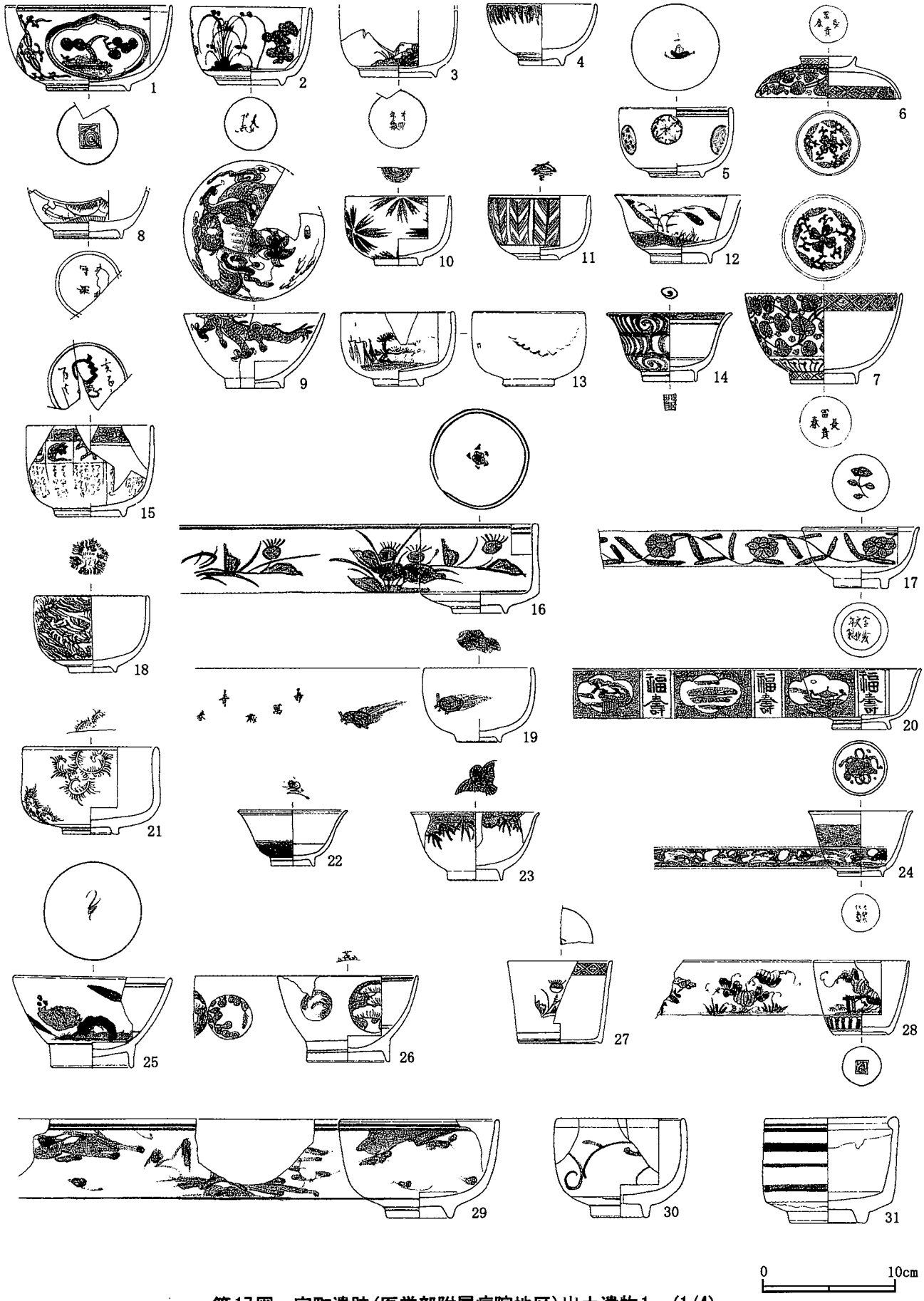
第14図　地下室2　(1/100)



第15図　井戸(1/100)

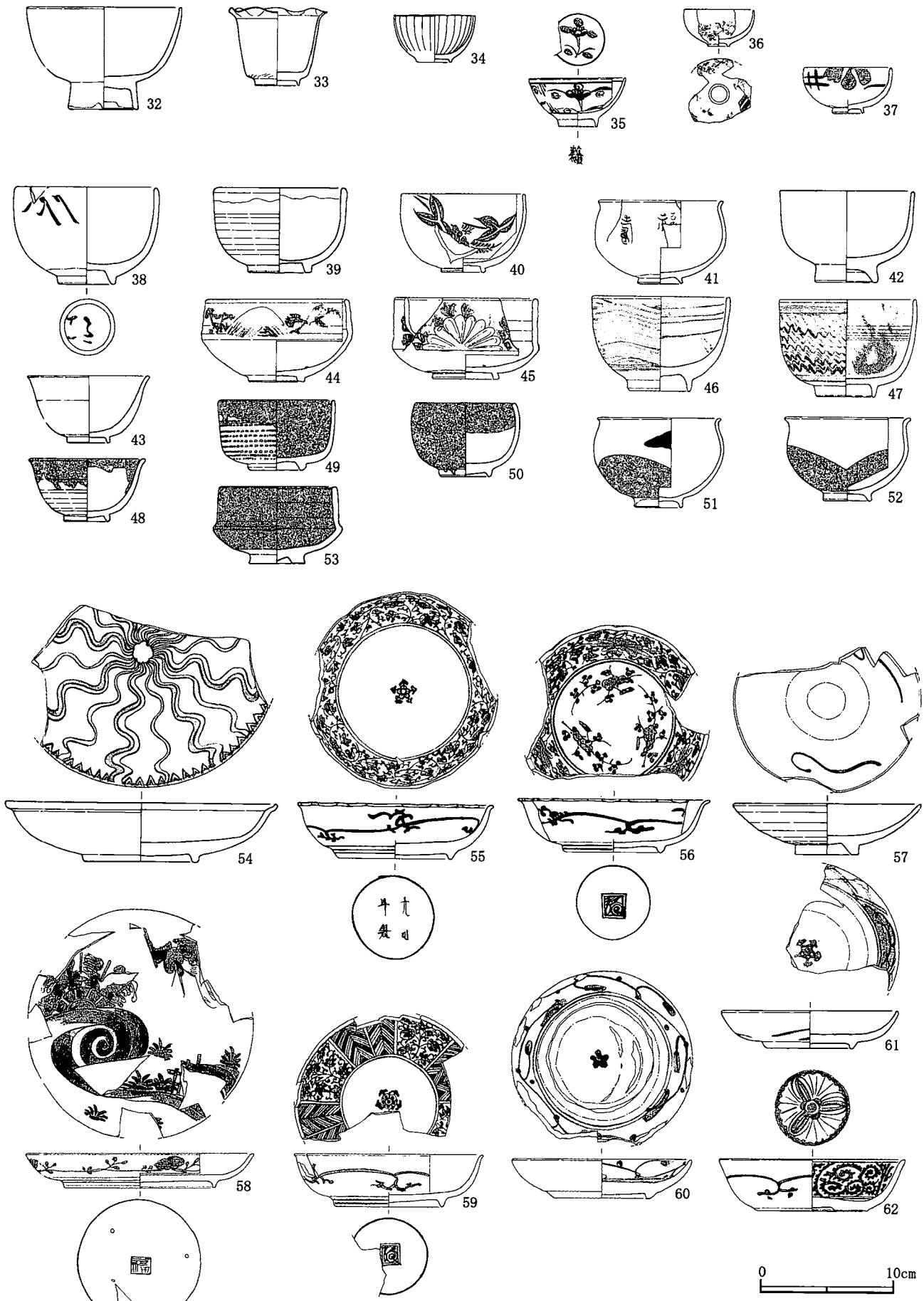


第16図　他の遺構(1/50)



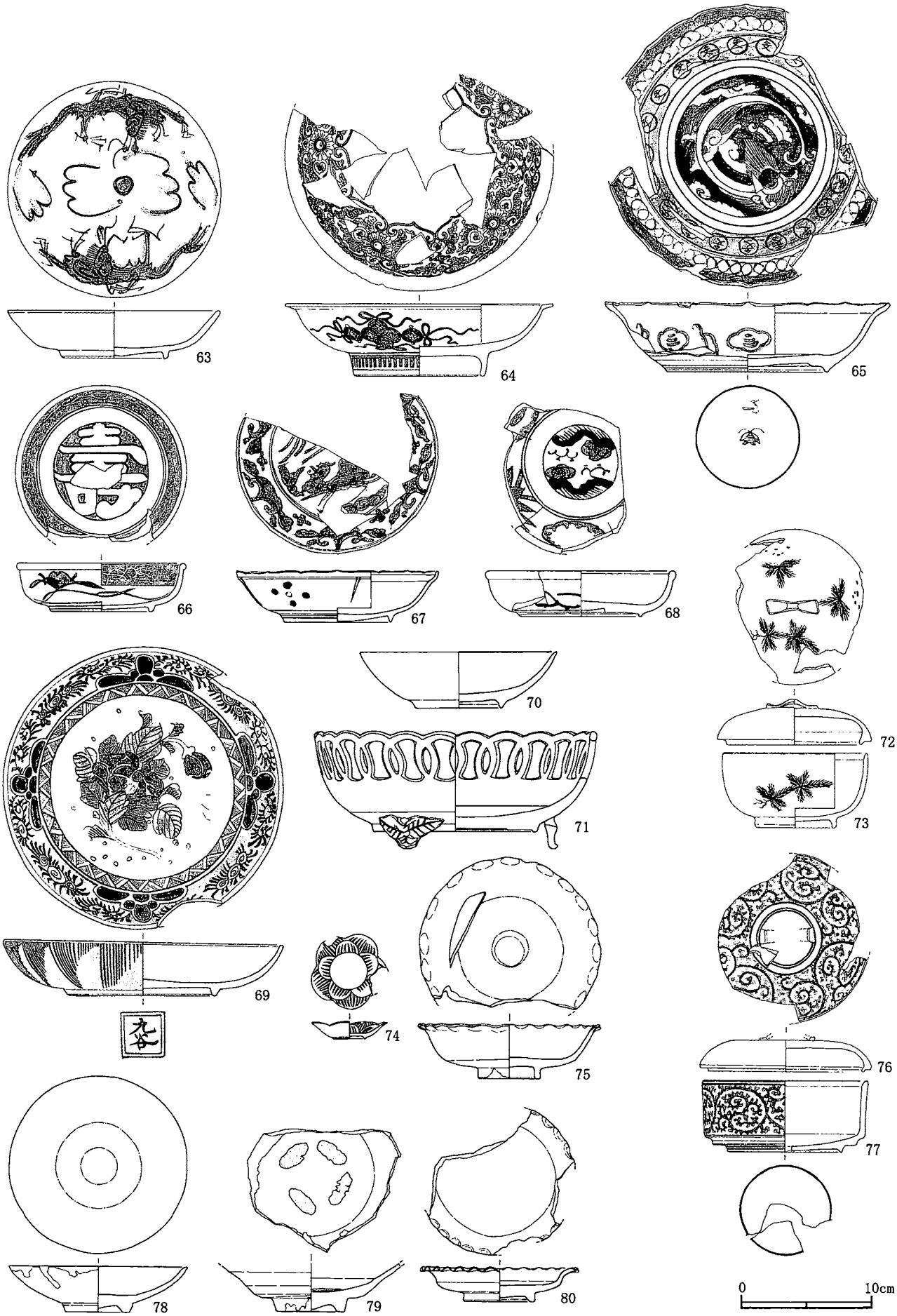
第17図　宝町遺跡(医学部附属病院地区)出土遺物1　(1/4)

1～28磁器－染付，29～31陶胎染付



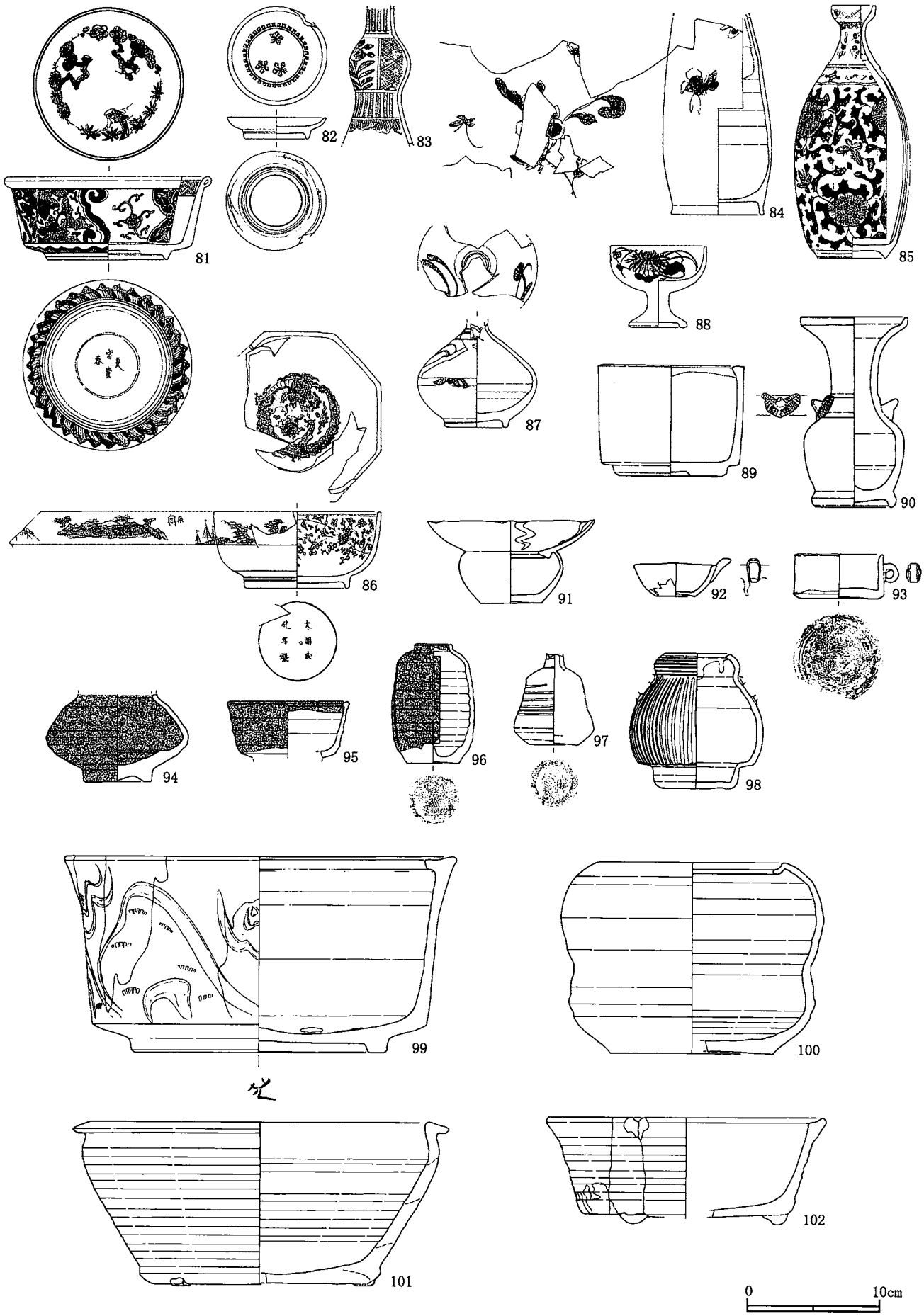
第18図　宝町遺跡(医学部附属病院地区)出土遺物2　(1/4)

32～34磁器－白磁，35・36磁器－色絵，37陶器－色絵，38～45陶器－灰釉，46・47陶器－鉄釉・白泥，48陶器－灰釉・緑色釉，49陶器－灰釉・黒色釉，50～52陶器－灰釉・褐色釉，53陶器－黒色釉，54～62磁器－染付



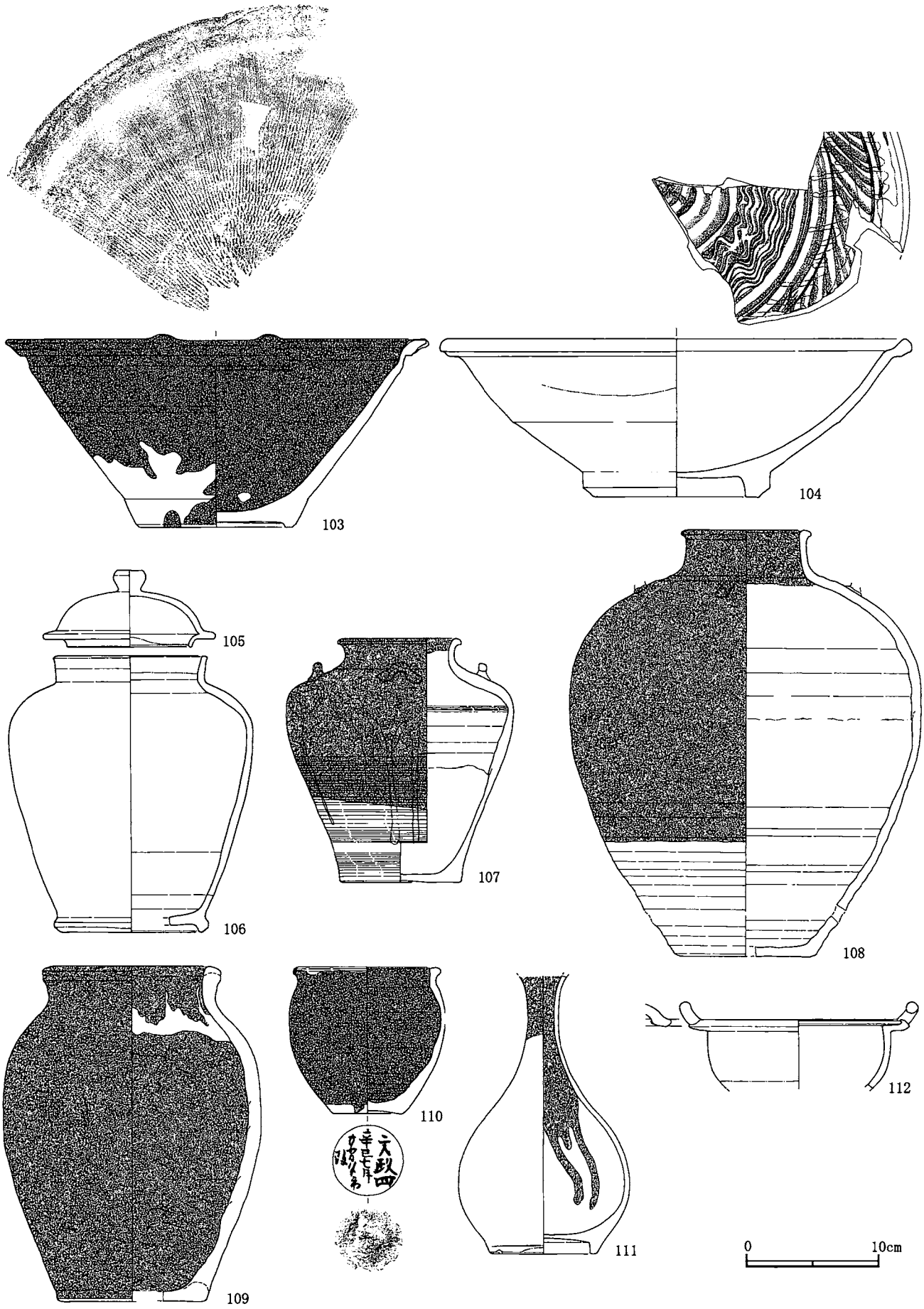
第19図　宝町遺跡(医学部附属病院地区)出土遺物3　(1/4)

63～68・72・73・76・77磁器－染付，69磁器－色絵，70・71磁器－青磁，74・75磁器－白磁，78陶器－緑色釉，79陶器－透明釉，80陶器－灰釉



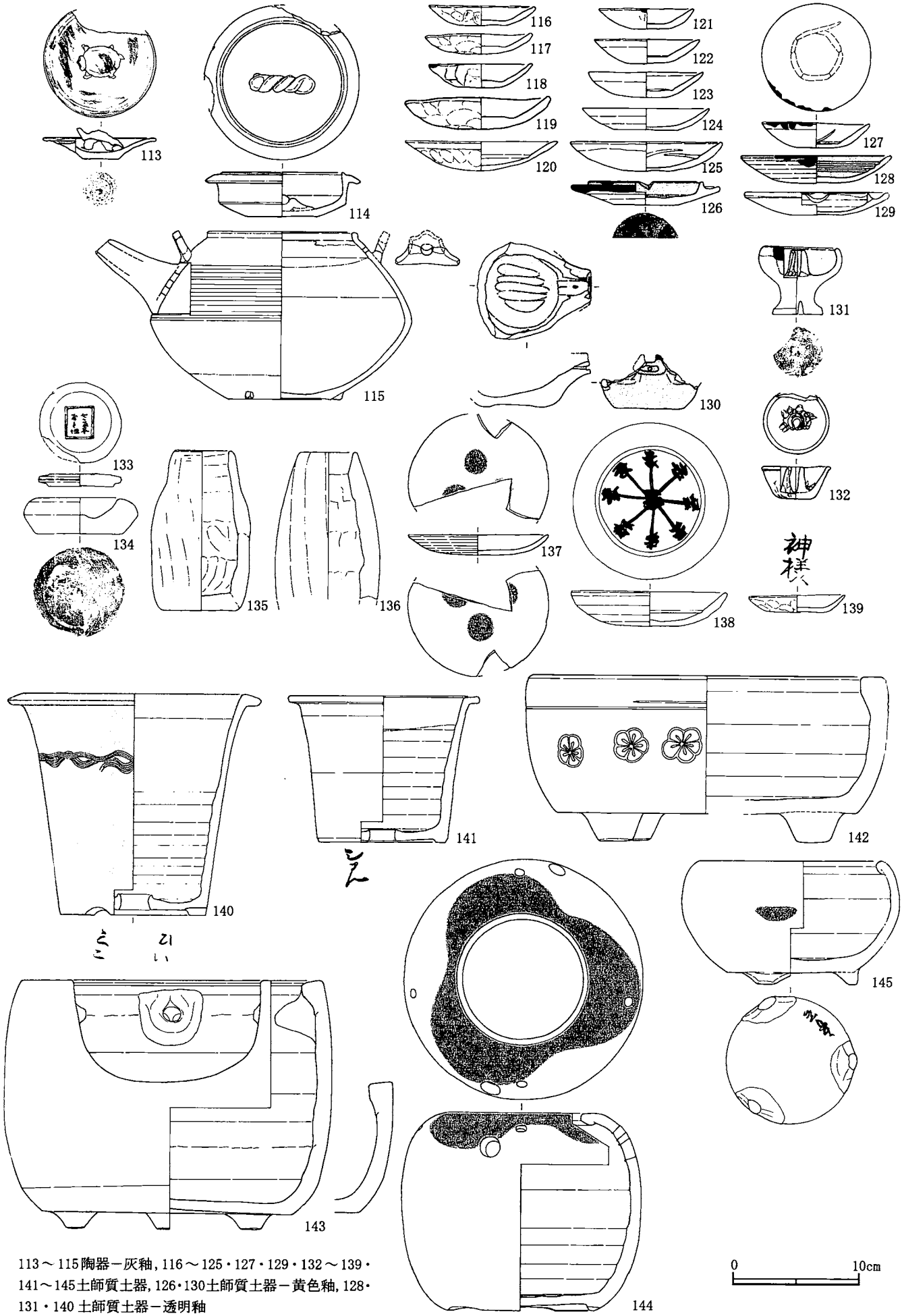
第20図　宝町遺跡(医学部附属病院地区)出土遺物4　(1/4)

81～88磁器－染付，89・90磁器－青磁，91磁器－白磁，92・93・97・99陶器－灰釉，94・96陶器－黒色釉，95陶器－褐色釉，98陶器－長石釉，100～102焼締め



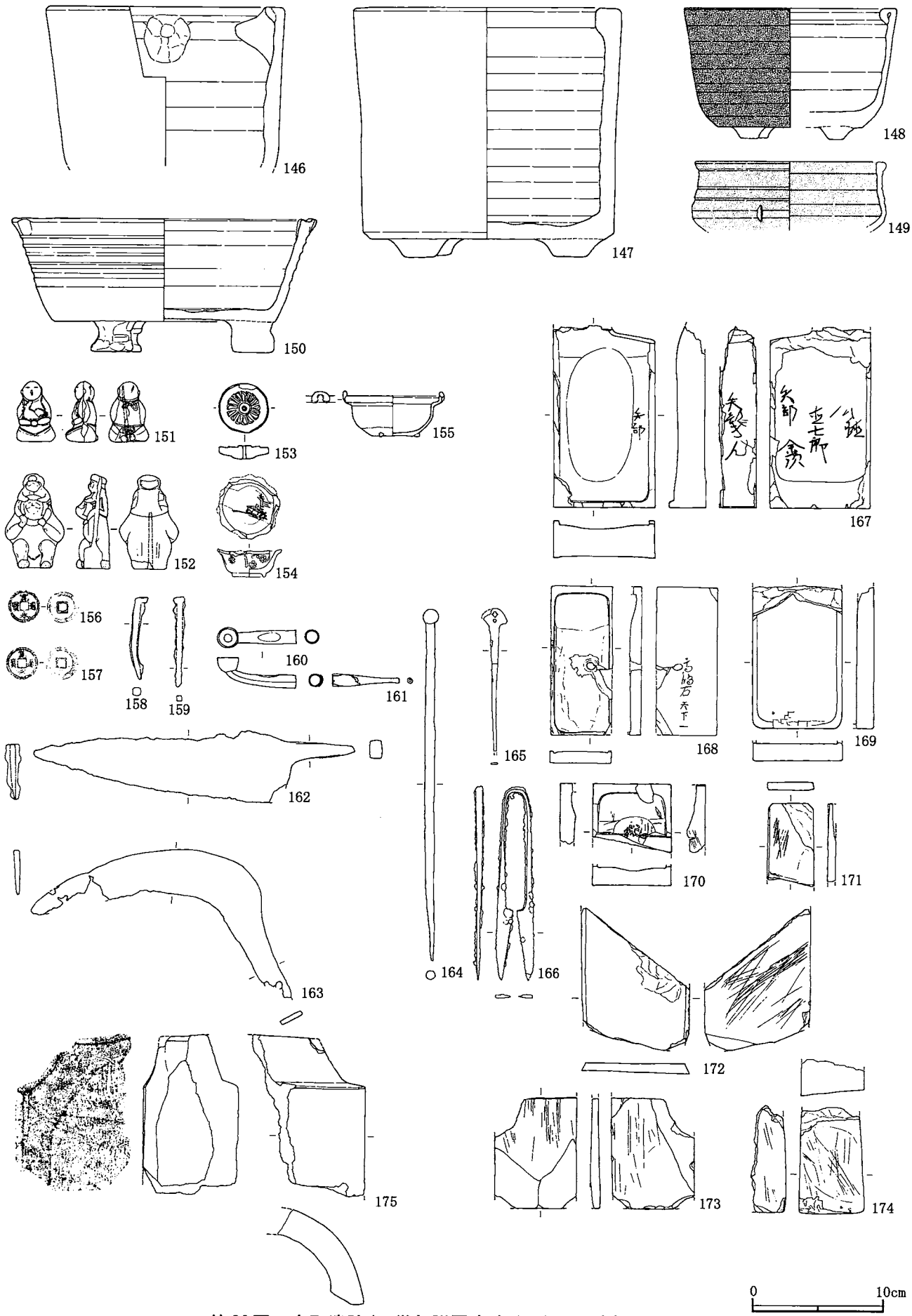
第21図　宝町遺跡(医学部附属病院地区)出土遺物5　(1/4)

103・108～110 陶器－褐色釉，104 陶器－鉄釉・白泥，105・106 磁器－白磁，107・111 陶器－褐色釉・灰釉，112 陶器－灰釉



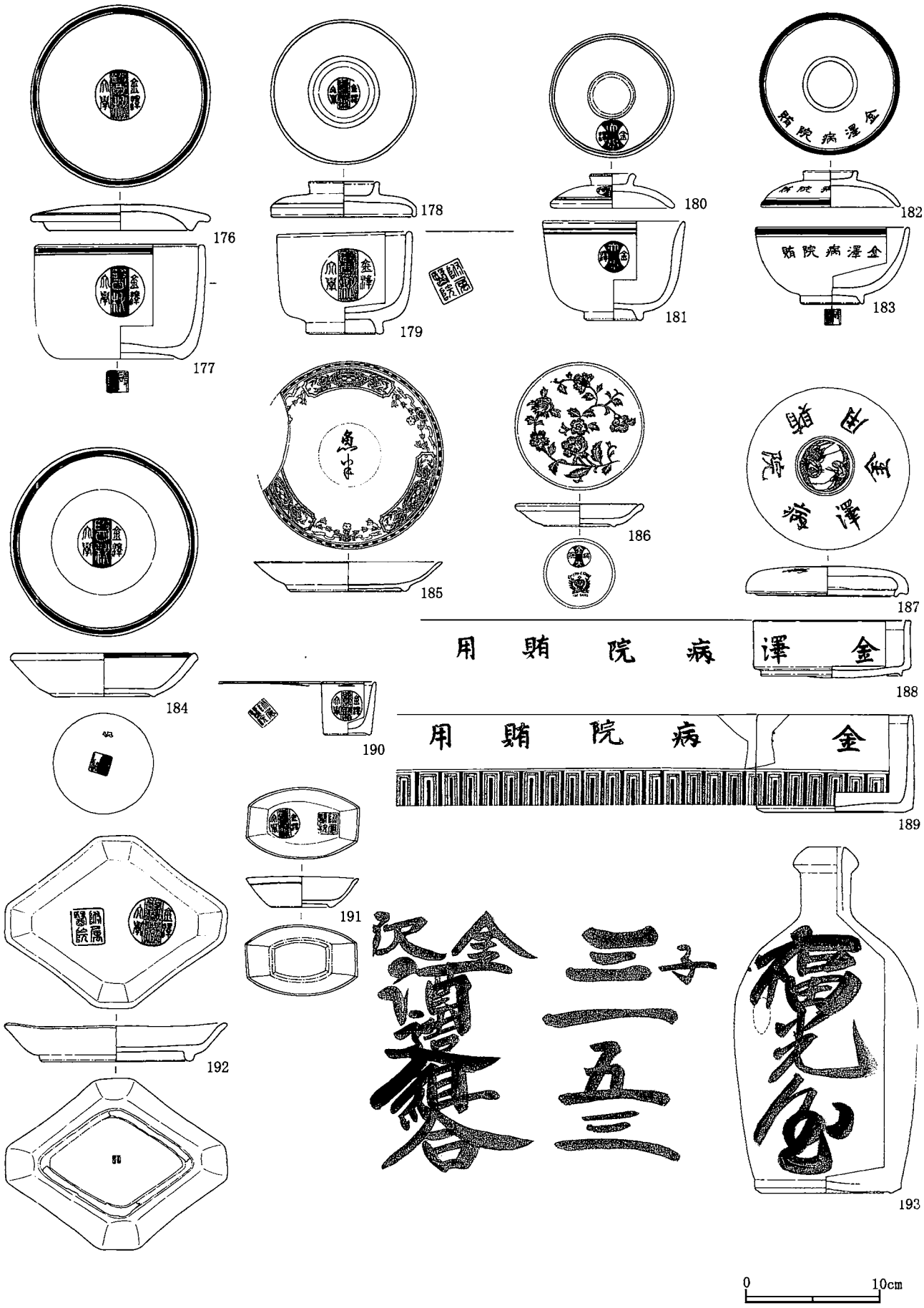
113～115陶器－灰釉，116～125・127・129・132～139・141～145土師質土器，126・130土師質土器－黄色釉，128・131・140土師質土器－透明釉

第22図　宝町遺跡（医学部附属病院地区）出土遺物6　(1/4)



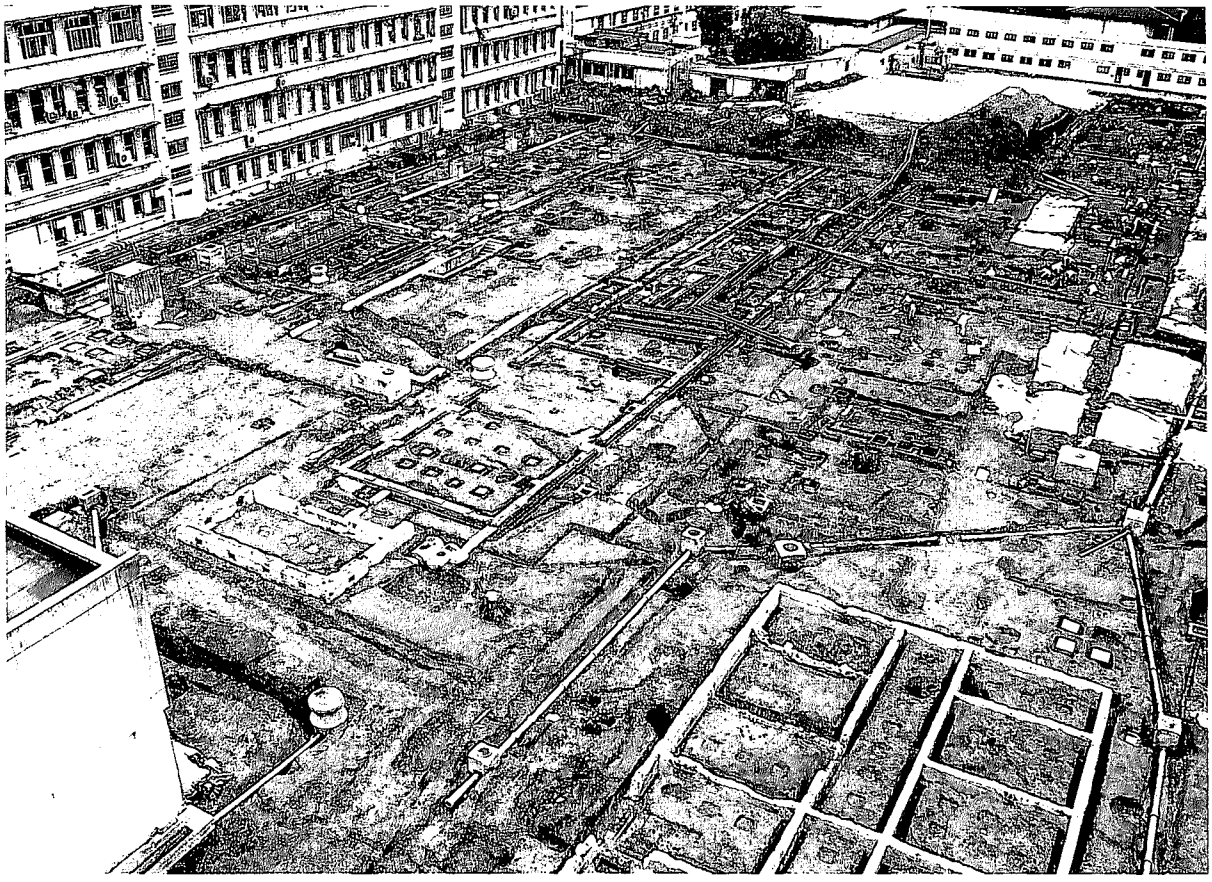
第23図　宝町遺跡(医学部附属病院地区)出土遺物7　(1/4)

146・147・151～154 土師質土器，148 土師質土器－赤漆，149 土師質土器－透明釉，155 陶器－褐色釉－ミニチュア，156・157 銭貨，158・159 鉄釘，162 鉄製包丁，163 鉄製鎌，164 金属製火箸，165 金属製簪，166 鉄製和鋏，167～170 石製硯，171～174 砥石，175 瓦

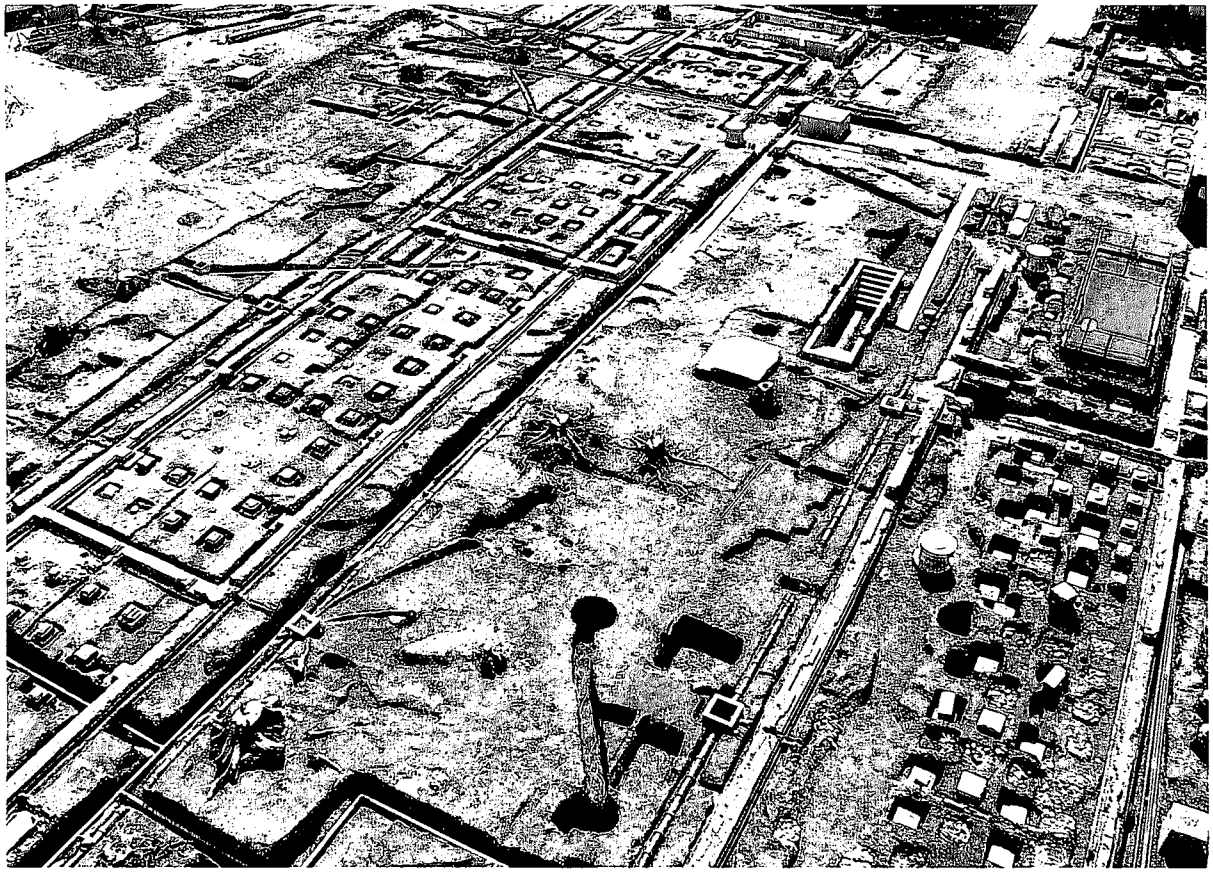


第24図　宝町遺跡(医学部附属病院地区)出土遺物8　(1/4)

176・177・182・183・184・186硬質陶器，178～181・185・187～192磁器，193陶器－灰釉

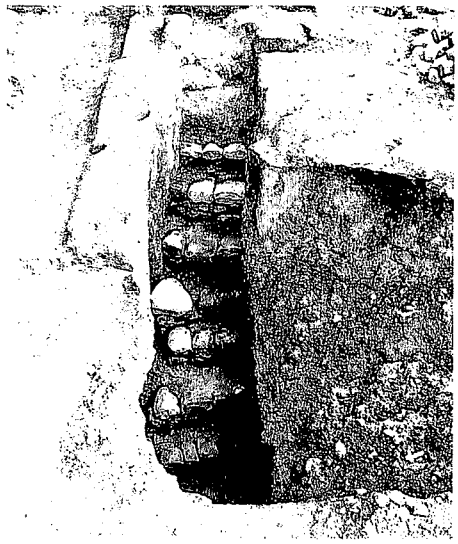


病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点　調査区全景（近世）　東から



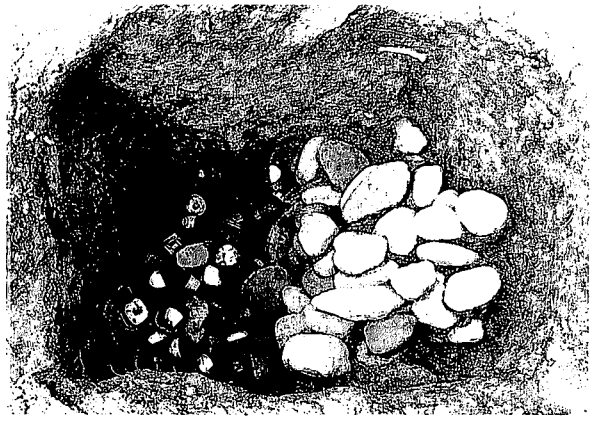
病棟Ⅰ・精神科病棟Ⅰ地点　調査区全景（近代）　西から

PL. 2

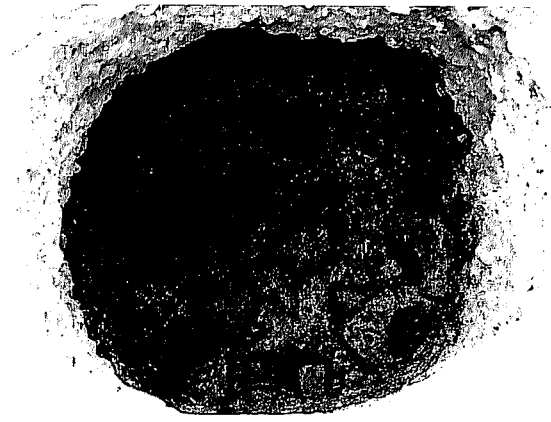


土坑 373

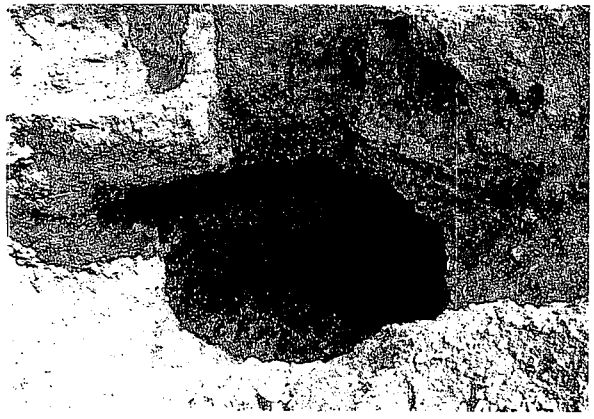
土坑 473（地下室）・395（井戸）



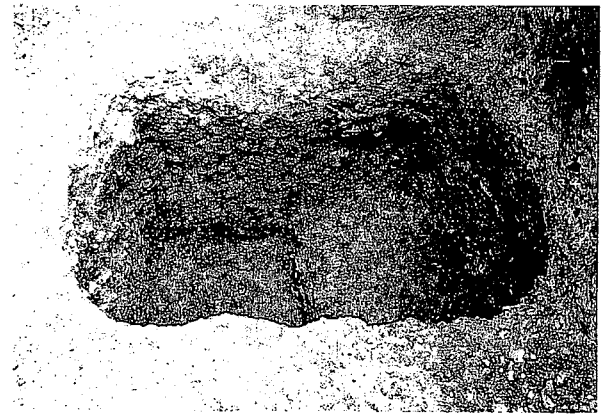
土坑 184



土坑 799

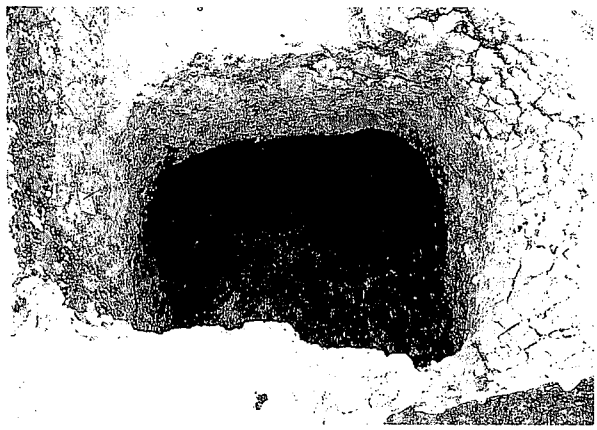


土坑 416

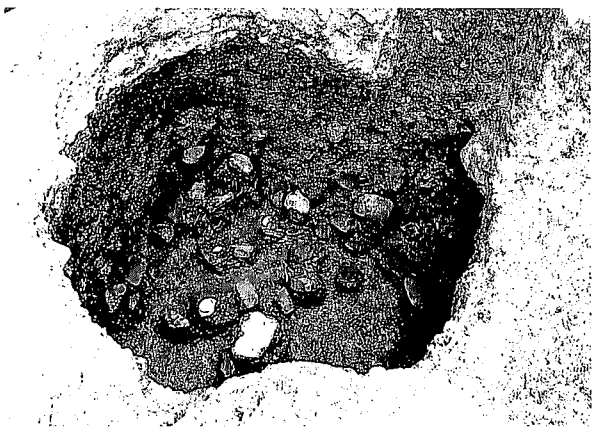


土坑 526

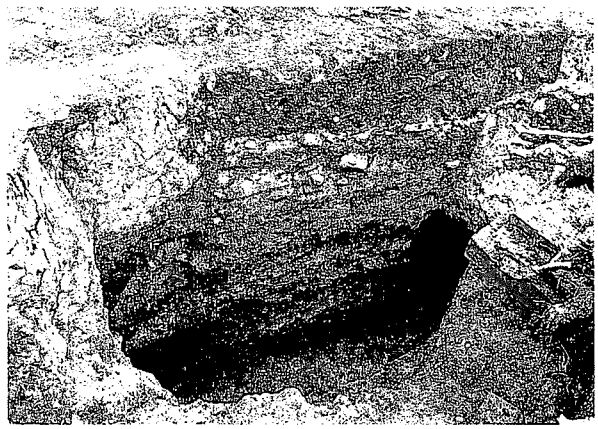
土坑 629



土坑 870

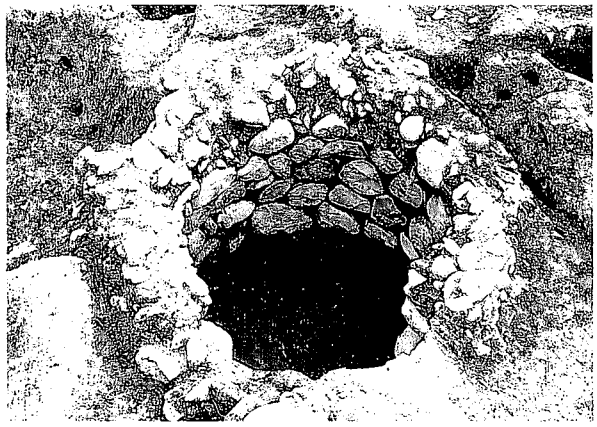


土坑 9

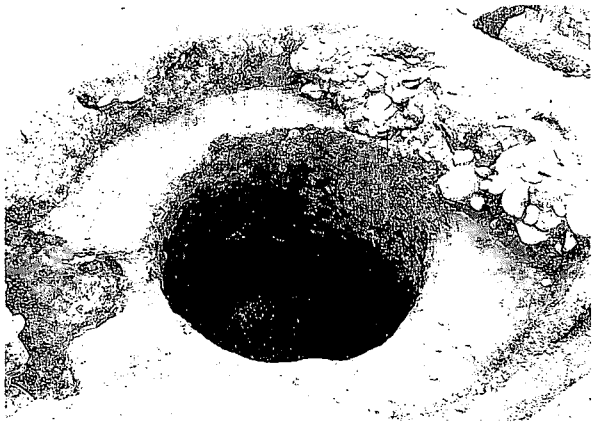


土坑 1015

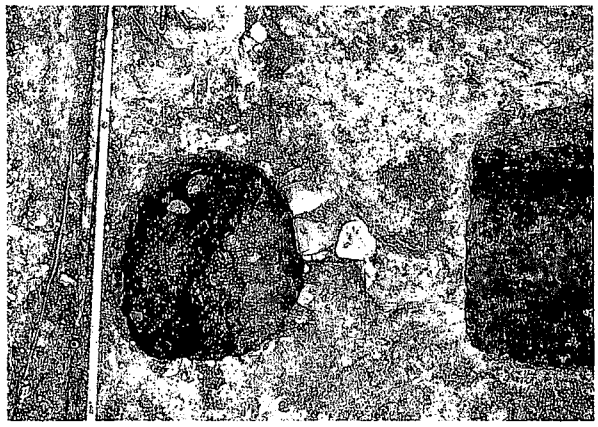
土坑 299



土坑 425

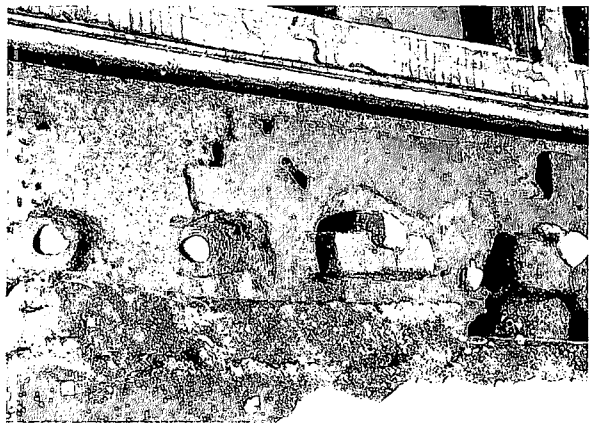


土坑 130



土坑 639

PL. 4



Ⅰ 10礎石1．Ⅰ 9礎石1

土坑452

土坑882

土坑806・807・808

金沢大学宝町遺跡医学部グラウンド地点

1. はじめに

本調査区は、宝町遺跡に含まれるが医学部附属病院地区にも医学部保健学科地区にも属さないため、単独で医学部グラウンド地点として扱った。調査は医学部排水処理槽設置に伴う埋蔵文化財調査であり、平成11(1999)年8月2日～8月20日にかけて行われ、調査面積は約286 m²である。

2. 調査結果

近世(第25図)

医学部グラウンド地点は、宝町キャンパスの南端に位置し、調査開始前は、金沢大学医学部のグラウンドとして利用されていた。調査区の南東、南西側は道路にあたり、南東側の道路を挟んで現在の経王寺と如来寺が位置する。両寺院を金沢城下絵図(天保・安政間)で眺めると、現在と比較し、当時の如来寺・経王寺は非常に大きな敷地をもった寺で、場所も現在地とは異なっていたことがわかる。本調査区は当時の如来寺・経王寺近辺にあたり、寺院に関わる遺構・遺物の出土も予想された。

調査の結果、調査区東隅に土坑が5基かたまって確認され、調査区北西壁に沿って溝が1条確認された。

遺構

溝

本地点を金沢城下絵図(天保・安政間)に重ね合わせると(第7図)、如来寺の北西境上に位置する。このため確認された溝(溝 91)はその境に関係する遺構と想定される。ただ、発掘調査範囲内では溝の直線部分しか確認できず、その溝がどこで折れ曲がるのかが不明なため、如来寺北西境のどの位置にあたるのかまではわからない。溝の半分以上が調査範囲外にかかるため、3 カ所だけ拡張し、溝幅を確認した。その結果、溝内には石積み及び栗石のような石の集中が確認された(第 27 図)。集石 1 は石積み部分と石集中部分に分けられる。石面の揃っている部分から北西部分が石積みになっており、そこから南東部は栗石のような石集中である。集石2は石積みのみ確認された。集石3は栗石のような石集中のみ確認された。集石1にある石積みの石面ラインを延長すると集石2の石積み石面ラインに対応し、さらにそのラインを延長すると集石3の石集中の北西側のラインに対応している。このことから、少なくとも溝 91 の北西側ラインには石積みが施され、中心には石集中が存在していた時期があったと推測される。断面図からは集石とは異なる時期に属する溝の存在もみてとれる。

現時点における集石の機能に関する解釈は2通りを考えている。

1)本遺構がいわゆる溝としてのみ機能していた場合である。この場合、溝内に見られる石積みは護岸、石集中は溝底に敷かれた石である可能性が高い。

2)溝と土塀の両方が構築されていた場合である。その場合、石集中は土塀の基礎の下部構造にあたる、いわゆる栗石であった可能性があり、石積みは護岸のためである。

双方の解釈とも、石積みで護岸していることには変わりがない。護岸する目的は、この溝を流れる水によって、壁が崩れるのを防ぐためであろう。

1)の場合には、溝が純粋な溝であるため如来寺の周囲が溝だけで区切られていたことになる。しかし寺である如来寺の周囲に、塀や柵、生け垣などの遮へい施設が存在しなかったとは常識的に想定しづら

い。しかも、溝の東側(如来寺敷地側)に遮へい施設の痕跡が確認できなかったことから 2)のように溝内に遮へい施設の痕跡があった可能性は充分考えられる。

土坑

上述した溝が如来寺の境界であった場合、5 基の土坑は溝より東側(如来寺敷地側)で確認されたことから、如来寺内に構築された遺構と考えられる。遺構からは、19 世紀が主体の陶磁器・土師質土器・擂鉢などが出土した。遺構の性格は現在のところ不明である。

遺物(第 28 図)

遺物は土坑と溝から出土した。肥前系陶磁器に加え、瀬戸・美濃系陶磁器、九谷系陶磁器が混じり、土器製火鉢や瓦、硯などが出土している。時期は 18・19 世紀が中心である。

8 は青磁染付で、高台裏に二重枠の渦福が書かれてある。9 は瑠璃釉のかけられた磁器で、焼継ぎが施されており、高台裏に赤で「中」と書かれている。溝 91 から出土した。30 は口縁部周辺の 4 方に対称的に穿孔が施されている土師質土器である。穿孔は焼成後に施されており、いずれの穴も外面から内面へ向かって穿たれている。溝 91 から出土した。31 は赤漆の施された土師質の火鉢で、底部には墨書が認められるが判読はできない。溝 91 から出土した。

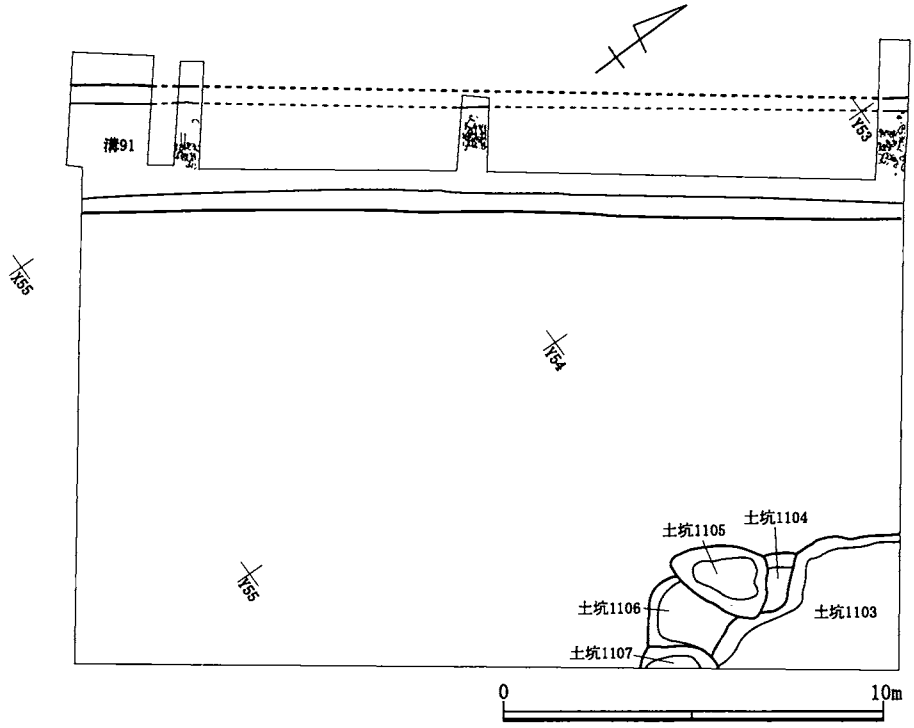
近代(第 26 図)

遺構

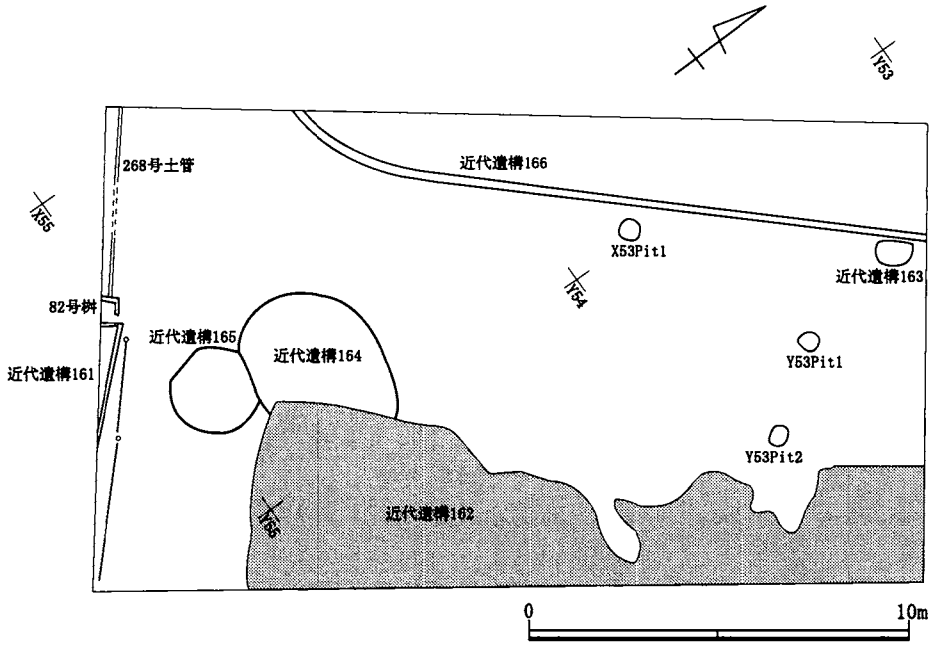
競技用の砂場(近代遺構 161)、グラウンドのトラック跡(近代遺構 166)、テニスコートの下部構造と推定される集石(近代遺構 162)、柱痕 (X53Pit1,Y53Pit1,Y53Pit2)、土管、桝などが確認された。昭和 31・32 年の金沢大学医学部・薬学部・結核研究所・医学部附属病院平面配置図には、グラウンドのトラックとテニスコートが描かれているが、上記の近代遺構 162・166 がそれにあたると思われる。近代遺構 162 の集石は、テニスコートの水はけを良くするために敷かれたものと考えられる。また近代遺構 161 の砂場に関しては、古くからこの場所を知っている人の話によると、昭和 41 年頃には砂場は存在しており、テニスコートとトラックはすでになかったとのことである。柱痕は、柱痕であるということはわかるが、いつ、どのように機能していたものかは不明である。

遺物

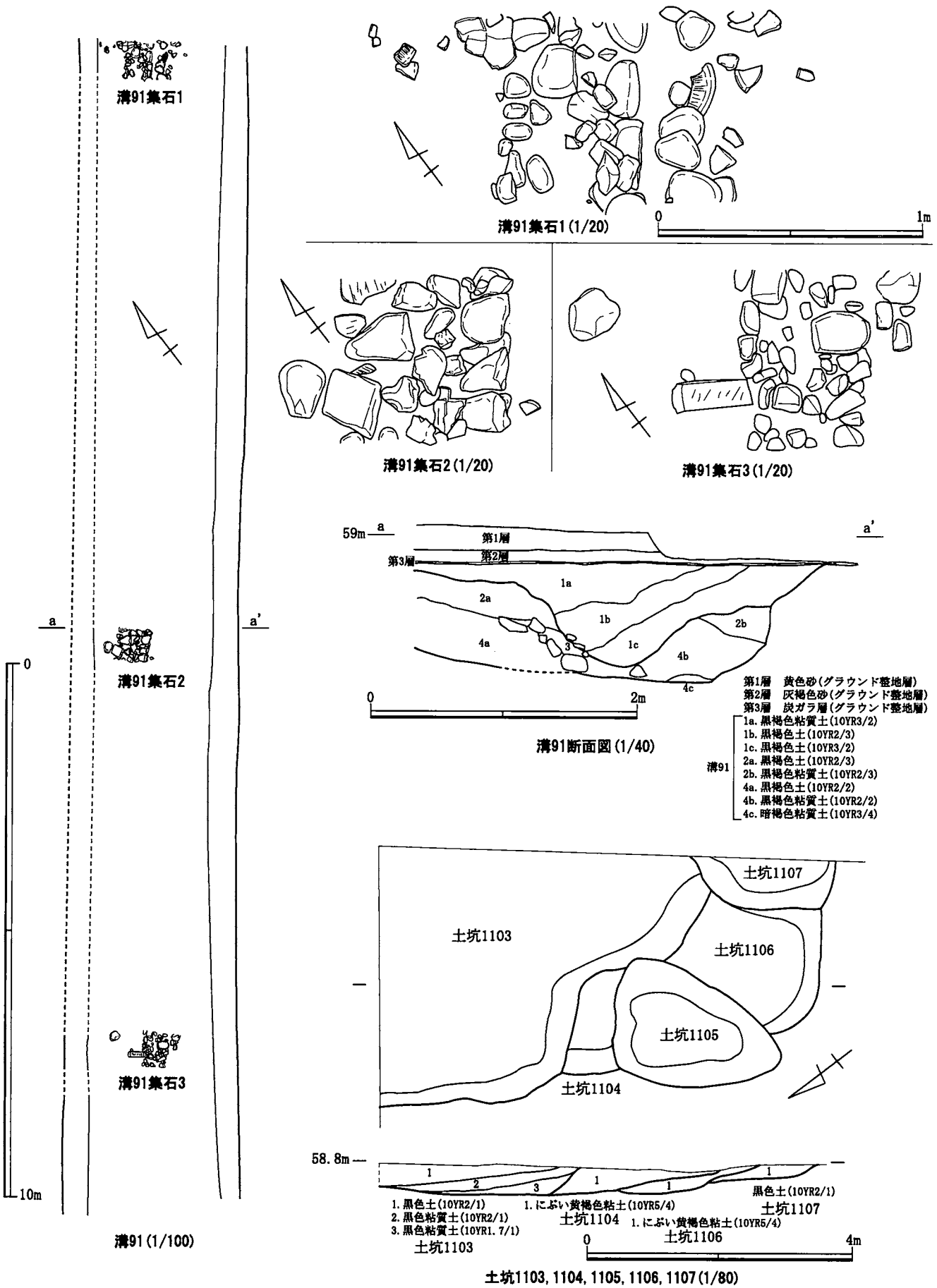
遺物は硬質陶器である病院食器や近・現代の磁器碗・皿などが少量出土している。



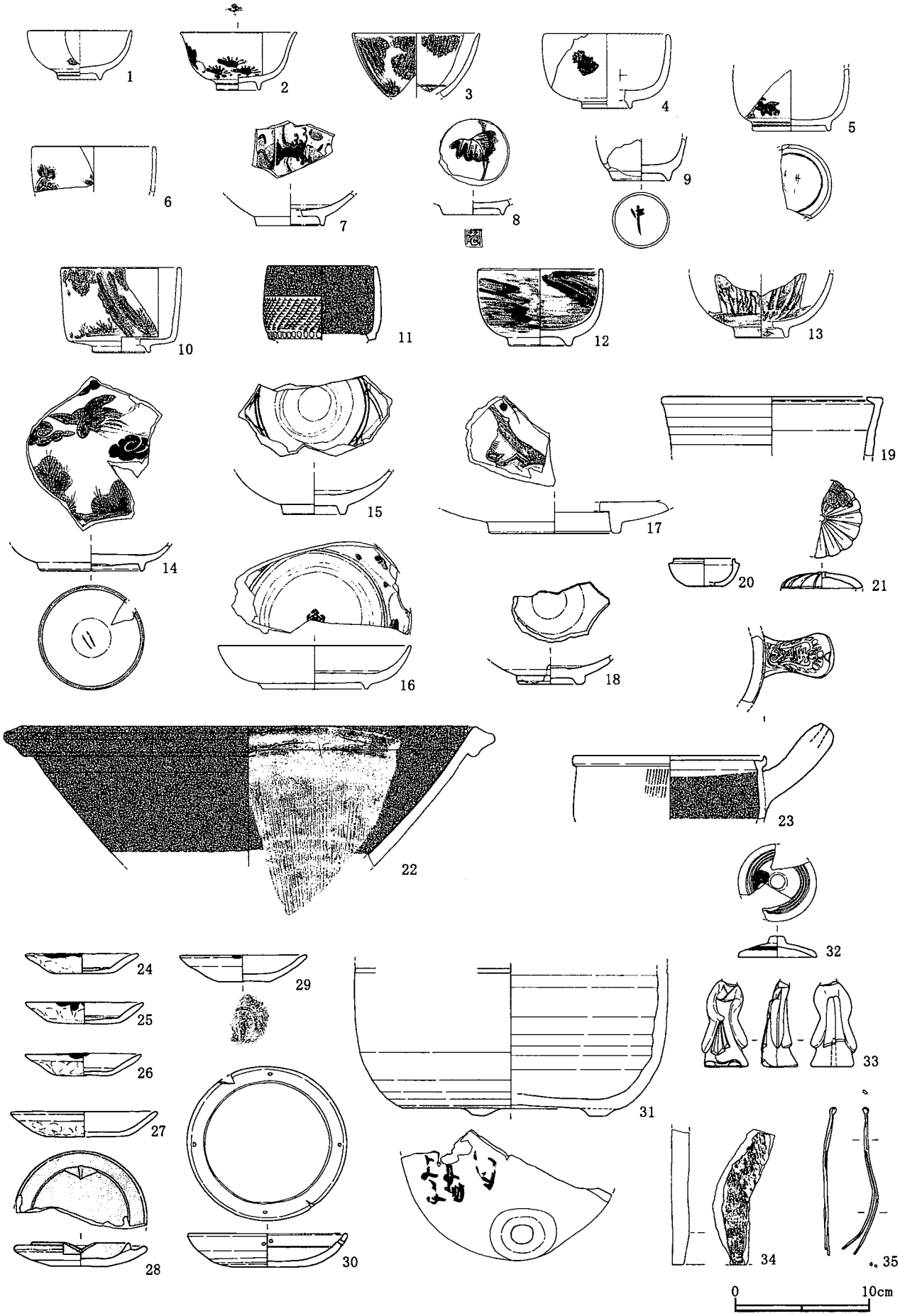
第25図　宝町医学部グラウンド地点　近世（1/200）



第26図　宝町医学部グラウンド地点　近・現代（1/200）



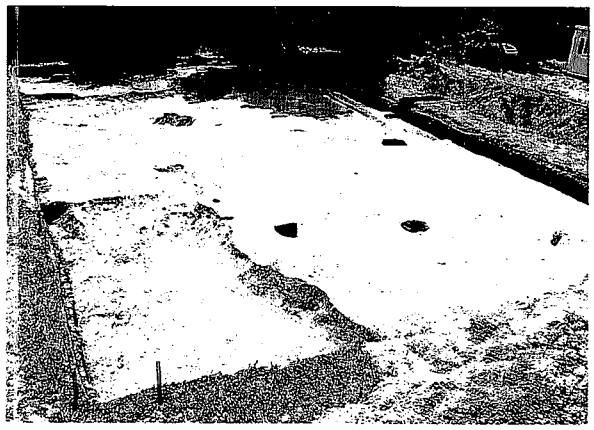
第27図　宝町遺跡医学部グラウンド地点遺構図



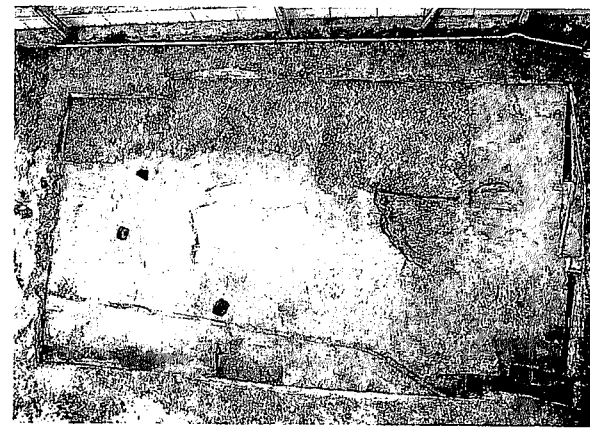
第28図　宝町遺跡医学部グラウンド地点出土遺物　(1/4)

1～7・14～17磁器－染付，8磁器－青磁染付，9磁器－瑠璃釉，10陶器－染付，11陶器－黒色釉，12・13陶器－灰釉・白泥，18～21陶器－灰釉，22・23陶器－褐色釉，24～27・29・30・33土師質土器，28土師質土器－黄色釉，31土師質土器－赤漆，32土師質土器－白泥，34瓦，35金属製簪

PL. 1



医学部グラウンド地点　調査区全景（近世）



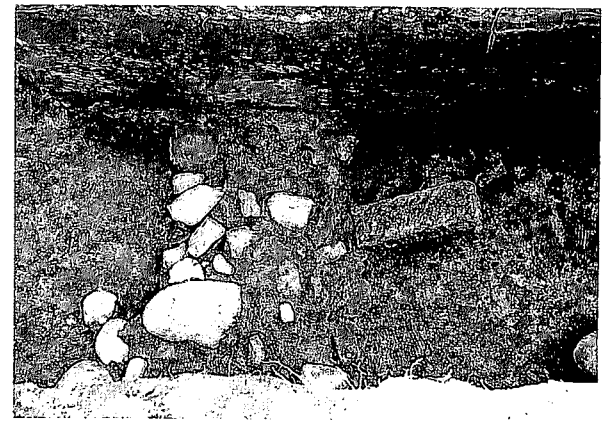
医学部グラウンド地点　調査区全景（近代）

溝 91 内集石 1

溝 91 内集石 2

溝 91

溝 91 内集石 2



溝 91 内集石 3

金沢大学宝町遺跡(医学部保健学科地区)

1. 調査に至る経緯

本調査は、金沢大学医学部保健学科校舎新営に伴う発掘調査である。遺跡確認のため、平成10(1998)年4月20日に試掘調査を行った。試掘坑は調査対象範囲(校舎I地点)内に3カ所設定し、重機による掘削を行った。結果、近世の遺物及び近代の建物跡が確認された。

2. 調査結果

近世(第29図)

本調査区内は、旧金沢刑務所(金沢監獄)時代の建築物及び構造物と、それらの移転に伴う解体、さらには、金沢大学の敷地になってからのグラウンド整備による導水管の設置などにより、著しく攪乱・破壊を受けている。確認された近世の遺構もその例外ではなく、そのほとんどが何らかの形で後世の攪乱を受けていた。そのような状況下で、近世と思われる堆積層が調査区西側でのみ確認できた。遺構は、土坑が220、溝が34、ピットが31確認された。土坑には、廃棄坑や植栽痕、井戸、地下室、炉跡なども含まれるが、その性格がわからないものも多い。

遺構(第29図)

廃棄坑－土坑10・46・52・89・144・145・149・157(第34図)など

廃棄坑と思われる遺構は80基近く確認できたが、その多くは、本調査区西側に集中して確認された。ただし今後の整理作業により、その数は多少の増減が予想される。80基近くの土坑のうち、大型のものは極僅かで、今回図に載せた土坑52などがそれにあたる。廃棄坑の多くは、溝(溝14·22など)に沿って並んでいることから、その場所が裏庭などの空間であった可能性が考えられる。土坑からの出土遺物は、陶磁器、土器を中心とした組成であるが、中には木皮(土坑89)や貝殻(土坑187)などが混じる土坑も確認できた。

井戸－土坑5・31・79・97・101(第34図)など

井戸は10基確認できたが、いずれも作業上の安全を考慮したため、完全に掘りあげることは出来なかった。最も深く掘ったのは土坑101で、調査終了後に重機を使用して確認面から約4mほど掘り下げたが、底は確認できなかった。10基とも後世の攪乱により上部が削られているため、井桁等の存在は不明である(井戸の各部名称については宝町遺跡(医学部附属病院地区)を参照)。井戸側に関しては、いずれの壁面にも井戸側らしき痕跡が確認できなかったため、素掘りの井戸であった可能性が高い。しかし、上述した土坑101からは、加工された凝灰岩が多く出土しており、それらが井桁、もしくは井戸側であった可能性も考えられる。

確認した10基の井戸を、宝町遺跡(医学部附属病院地区)の井戸と比べると、井戸の径が1m前後とやや小さい。さらに石積みの井戸も全く確認できなかった。この違いが何を意味するのか今後検討していきたい。

地下室－土坑39・82(第34図)

地下室と考えられる遺構は2基確認できた。

土坑 39 は棚と推定される施設を有するが、平坦ではなく、断面は三角形を呈する。覆土は 9 層に区分でき、多くの遺物が出土した。断面をみると、覆土は遺構の北側から流し込まれたことがうかがえる。

土坑 82 は楕円形の室部を持つ地下室で、覆土は 7 層にわかれる。7 層に含まれる石は、入口部の下方のみに散らばることから、地下室使用時には、石による入口保護が成されていた可能性も考えられる。

両遺構を宝町遺跡(医学部附属病院地区)の地下室形態分類模式図(第 12 図)に当てはめると、土坑 39 はⅡ-B2、土坑 82 はⅤ-D に近い形と思われる。ただし、両遺構とも後世の削平を受けているが、それでも宝町遺跡(医学部附属病院地区)で確認された地下室と比べると、その規模は小さく、大人一人が屈んで入れる大きさである。その差異の要因としては、時期差、身分差、機能差などが考えられるが、それらの検討は本報告に譲りたい。

炉跡－土坑 125・126・127(第 34 図)

炉跡と思われる遺構は、校舎Ⅱ地点の西側に 3 基並んで確認された。このうち土坑 126 は炉跡かどうか検討を要するが、残りの 2 基はその可能性が高く、炭化物や焼土、焼けた礫などが多く混じり、土坑 127 には、曲物の燃えかすのようなものが残っていた。本遺構のすぐ北側に井戸(土坑 124)も確認されているため、この付近が台所であった可能性は高く、本遺構も竈に関係するものと考えている。当地点における屋敷割り、また屋敷地の空間構成を考えるうえで重要な遺構である。

溝状遺構

溝状遺構は 34 条確認できたが、そのうち何らかの境界を示すと思われる溝が、幾条か存在する。溝 1 ～ 4 や溝 14 などである。

校舎Ⅰ地点の南に位置する溝 1 ～ 4 のうち、溝 1・2 は、ほぼ直線上に並び、溝 1・2 とほぼ直交するかたちで、溝 3・4 が位置する。溝 3・4 は直線上には並ばない。溝 1・2 に比べ、溝 3・4 はその幅が狭く浅い。

溝 14 は、校舎Ⅱ地点の東に位置し、調査区をほぼ南北に縦断する溝である。幅は 70 ～ 90cm ほどで、深さは後世の削平を受けているため、10 ～ 20cm と浅い。南北に続いていくと思われるが、両端とも攪乱により壊されている。

金沢城下絵図(天保・安政間)との対比が可能となった宝町遺跡(医学部附属病院地区)を基準として、重ね合わせたものが第 7 図であり、本調査区内で確認された溝状の遺構などを参考にして、やや微調整したものが第 32 図である。その結果、溝 1 ～ 4 は、経王寺の東にあった「横山政次郎下屋敷」と「射場」の境に、溝 14 は「横山政次郎下屋敷」の東境に関係する遺構ではないかと思われる。校舎Ⅰ地点の調査では、調査区南側の溝 1 ～ 4 の周辺に遺構が集中しており、その北側ではほとんど遺構が確認できなかった。また校舎Ⅱ地点の調査でも同様に、溝 14 に沿って遺構は並んでいるが、それより東側ではほとんど遺構が確認されなかった。この遺構が非常に少ない部分は、重ね合わせた絵図でも空白地となっている。

その他－土坑 4 など

性格がわからない遺構としてあげた。その数も多いが、今後、その位置や他遺構との関係から、その性格が推定できるものもでてくると思われる。

第 34 図の土坑 4 は、校舎Ⅰ地点で確認された遺構で、断面形は、壁面がオーバーハングして袋状を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は 9 層に区分でき、下層にいくほど粘性が大きくなる。遺物も下層

から多く出土した。現時点においては、貯蔵庫のような役割を持つ遺構であったと考えている。

遺物(第 36 ～ 38 図)

本調査区内から出土した遺物は、宝町遺跡(医学部附属病院地区)とほぼ同じ様相を呈するが、18・19 世紀の遺物が主体をなす。また現時点においては、中国青花は見当たらない。

第 36 図の No.4･5･8･9･26･27 には焼継ぎが施されており、No.9 の高台裏には「右」のような文字(記号)が書かれている。No.19 は黄緑色釉のかかった陶器である。陶器としたが、その胎土は非常に軟らかい。土坑 144 からの出土である。No.20･21 の高台裏には墨書が施されている。第 38 図の No.55･56 にも墨書が施されており、No.56 の墨書は「天神」と読むことができる。両方とも、土坑 52 からの出土である。No.62 は土坑 46 からの出土で、焜炉と思われるが、上下の仕切にある穴は貫通していない方が多い。

近・現代(第 30 図)

旧金沢刑務所(金沢監獄)の建築物が主である。明治時代に金沢監獄(大正 11 ～ 13 年頃に改名)が当地に竣工されてから、昭和 45 年までの間に、多くの建物が建築または増改築された。しかし金沢市田上町への移転に伴う解体、さらには、金沢大学の敷地となった後のグラウンド整備によって、大きく破壊され、建物で残っているのは基礎部分のみである。現在、この監獄の一部が、愛知県犬山市の博物館明治村に移築保存されている。また、旧金沢刑務所(金沢監獄)の図面が、少ないながらも残っていたため、それぞれの建物跡の比定(第 33 図)が可能となった。

旧金沢刑務所跡(金沢監獄跡)

確認できた建物跡(第 31 図)は、中央看守所跡と舎房跡、工場跡である。中央看守所の建物上部は、現在、愛知県犬山市の博物館明治村に移築保存されているが、今回確認されたのは、その基礎部分(第 35 図)である。建物の構造は八角形を成しており、今回、その一角を切り取り保存した。舎房も基礎(第 35 図)のみであったが、しっかりと残っており、当時の第三舎と第四舎、第五舎に相当する。いずれの基礎も、3 ～ 10cm 大の栗石が厚さ 20cm ほどに敷き詰めてあり、コンクリート基礎の厚さは約 20cm、幅 60cm ほどである。しかし、コンクリート基礎上部の構造は、第三舎・第五舎と、第四舎とでは異なっており、前者が、コンクリート基礎の上に煉瓦を 2 段積み、その上に凝灰岩を並べるのに対し、後者は、コンクリート基礎の上に凝灰岩を並べる構造をとっている。ただ両者とも、建物表側はしっかりと揃えてあり、見栄えを重視していたことが窺える。また、第三舎の一部にはコンクリートを貼った面が残っていた。第三舎・第五舎の舎房基礎の内寸は、廊下が幅約 3 m で、その廊下を挟んで両側に並ぶ各房の大きさは、2.2 × 1.5m で約 3.3 ㎡ (1 坪＝ 2 畳) である。しかし残っている図面には、一部屋の大きさは 1.5 × 1.125m で 1.6875 ㎡(0.5 坪＝ 1 畳)と書かれてあり、基礎からみた一部屋の大きさと比べると半分ほどである。これは当時の壁が相当厚かった(壁の厚さが基礎幅 50cm を越える)ためか、それとも図面のほうが計測間違いであるのか疑問であったが、実際に博物館明治村に行って計測したところ、約 2.5 × 1.75m で 4.375 ㎡であった。これをもとに計算すると、基礎幅 50cm に対して壁(各房の仕切)の厚さは 30cm ほどである。

工場跡は 4 カ所で確認でき、当時の第 6 ～ 9 工場に相当することがわかった。第 6 工場は明治 36 年、第 7 工場は大正 11 年、第 8 工場は昭和 27 年、第 9 工場は昭和 25 年に建てられ、第 7 ～ 9 工場はその後増築されている。第 6 工場は基礎下の栗石が一部確認できただけであったが、刑務所資料にはその箇

所が物置であったと記されている。第 7 工場の基礎は厚さ 13 ～ 16cm ほどのコンクリートで、鉄筋(針金)が組み込まれ、木枠によって固められたと思われる木目が一部に残っていた。第 8 工場は、栗石のみが確認できた。第 9 工場跡に確認されたコンクリート製の建築物は、第 9 工場の一部と思われ、この調査に参加した作業員数名によると、木材加工を行っていたということである。実際、木材加工のための機械を設置したと推定される台座も残っており、その周辺では、雨が降ると今でも油が浮いていた。また刑務所内の様子を知る人の話では、第 7 工場は木工場で、第 8 工場は雑工場であったが、時代や時期によって造られるものは変わったとのことである。

建物基礎以外で目をひいたのは、解体時の大きな廃棄坑の上部にあった、舎房内の扉である(第 38 図 No.82)。解体によってか、壊れてはいるが、大まかな形状は留めており、視察孔も付いていた。

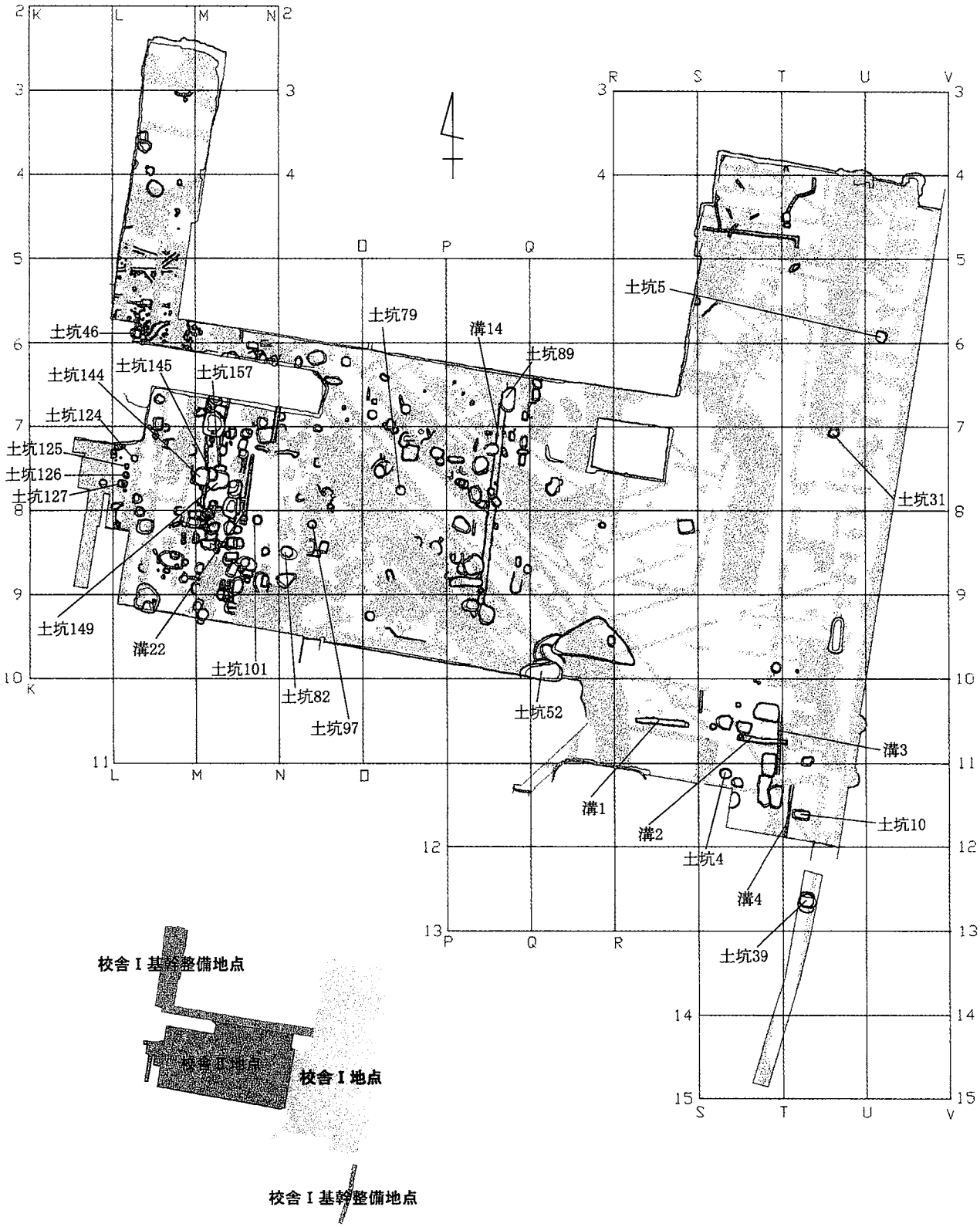
遺構(第 30 図)

近代の遺構は 183 基確認できた。その性格は、金沢監獄・旧金沢刑務所で用いられたと考えられる瓦を棄てた瓦廃棄坑(近代遺構 2・12・37・78・103・109・110・117・130・177)や、第 35 図のような工場で使用されたと思われる砥石を棄てた砥石廃棄坑(近代遺構 3・183)、ガラスを棄てたガラス廃棄坑(近代遺構 28・30・102・150)、炭ガラ廃棄坑(近代遺構 5・106・107・116)、凝灰岩や煉瓦、漆喰を棄てた廃棄坑(近代遺構 11・38)など多種にわたる。また遺構の性格はわからないが、特殊なものに近代遺構 6 があげられる(第 35 図)。これは上面が 2 × 4m、下面が 1.2 × 2m、深さ 1.4m ほどの逆台形を呈し、四方の壁に 20cm ほどの河原石を均等に貼り付けた遺構である。構築年代は、この遺構を掘り込んで第 7 工場の基礎が造られているので、大正 11 年以前に遡ると思われる。(ただし、第 7 工場は昭和 25 年に増築しているので、その増築部分にあたると構築年代も新しくなる可能性がある。)

遺物(第 38 図)

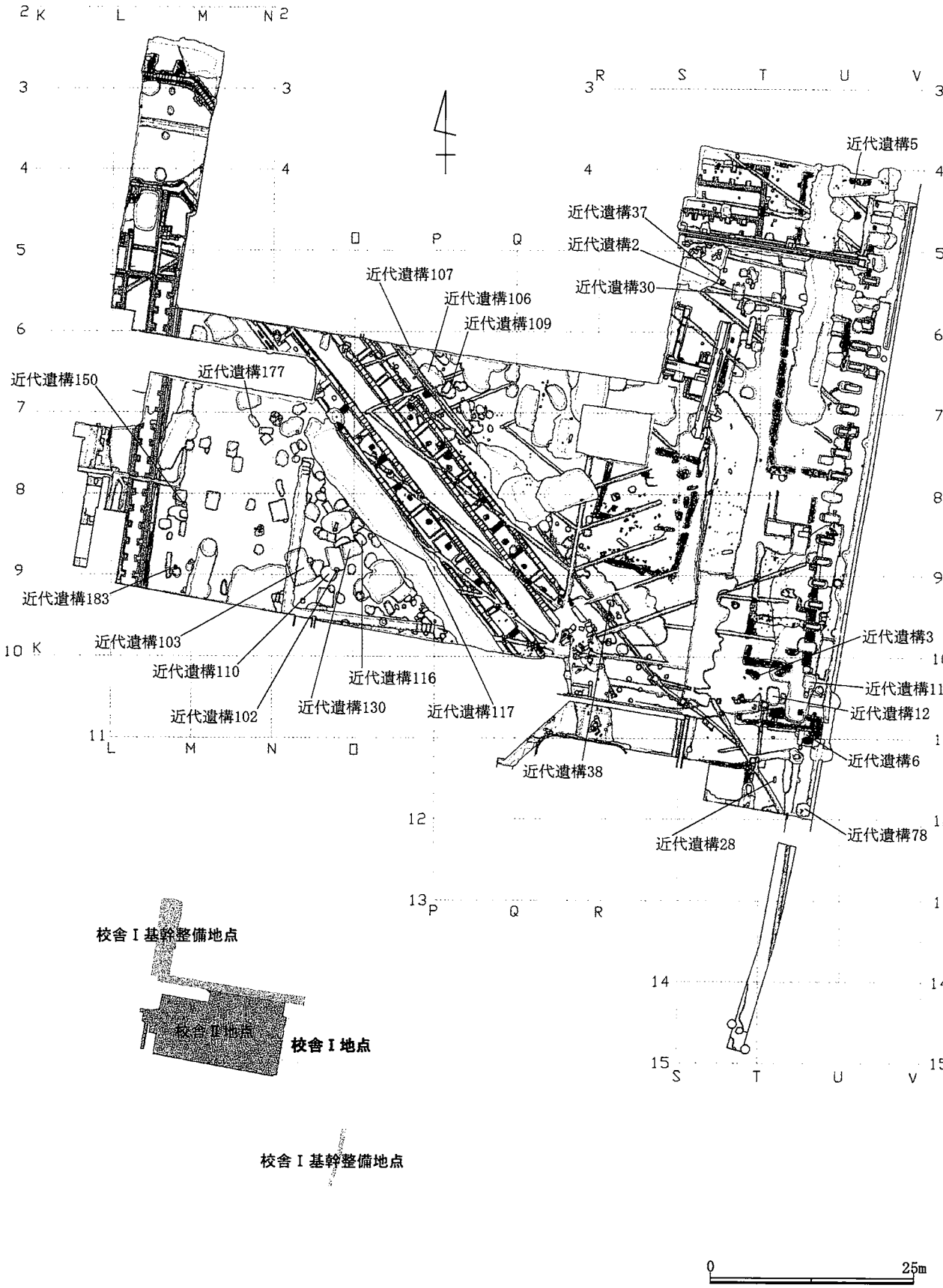
刑務所で使用されたと考えられる茶碗(第 38 図 No.70 ～ 79)から、舎房の各房に設置されていた洗面台(第 38 図 No.80)や土管(第 38 図 No.81)まで多岐にわたる。茶碗には、「監」や「刑」、「硬陶」の文字が入ったものがあり、それぞれ(金沢)監獄、(金沢)刑務所、(日本)硬質陶器を意味すると考えられる。日本硬質陶器株式会社は、明治 41 年に金沢市に設立されている。

「監」と「刑」の茶碗が存在するのは、大正 11 ～ 13 年にかけて行われた政府の施策により、監獄が刑務所に、囚人が受刑者にといったように、刑務所用語が改正されたことによるのであろう。以上から「監」と「硬陶」の文字が入った茶碗は、明治 41 年以降、大正 13 年以前に使用されていた可能性が高い。

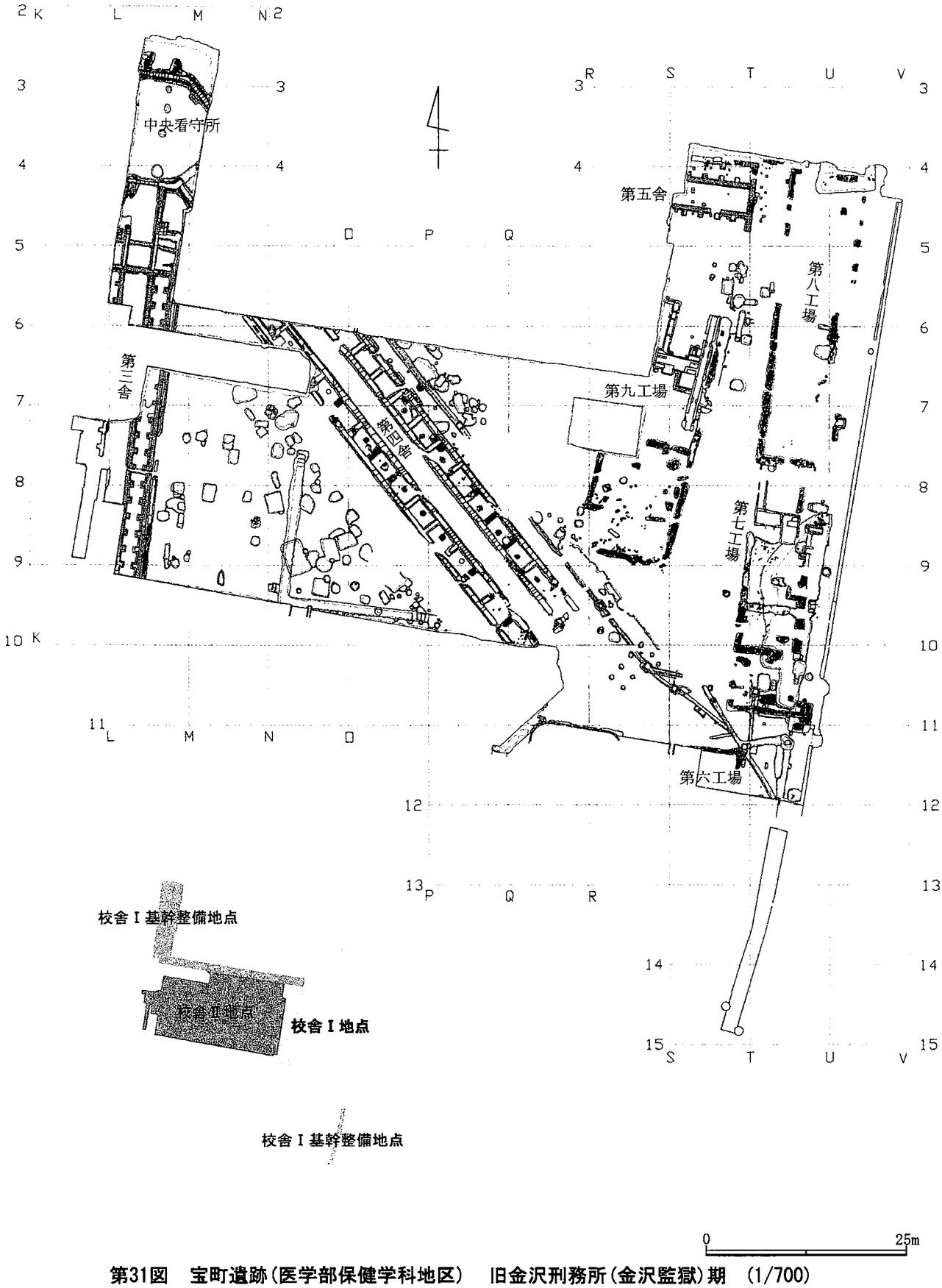


0　25m

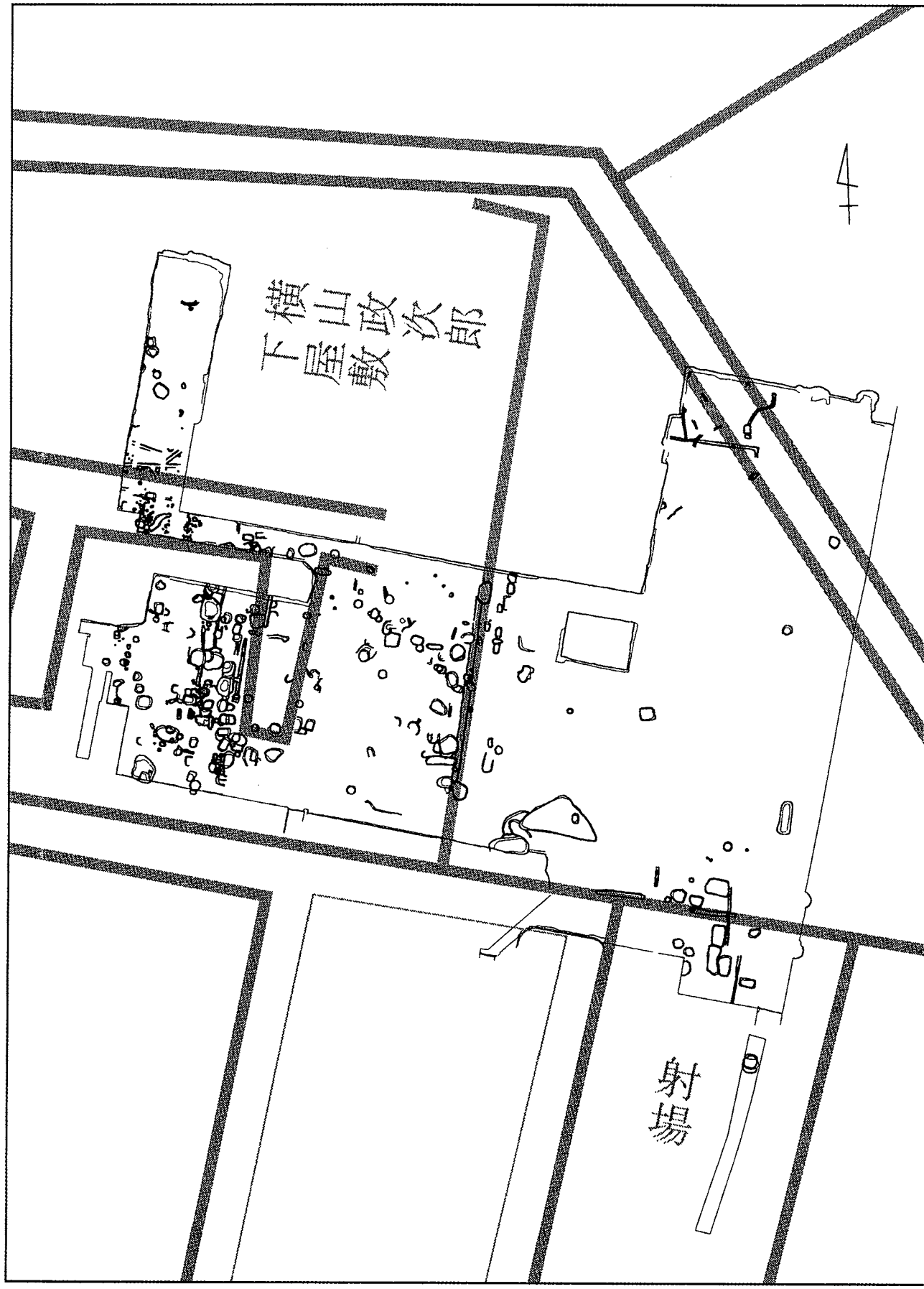
第29図　宝町遺跡(医学部保健学科地区)　近世　(1/700)



第30図　宝町遺跡(医学部保健学科地区)　近・現代　(1/700)

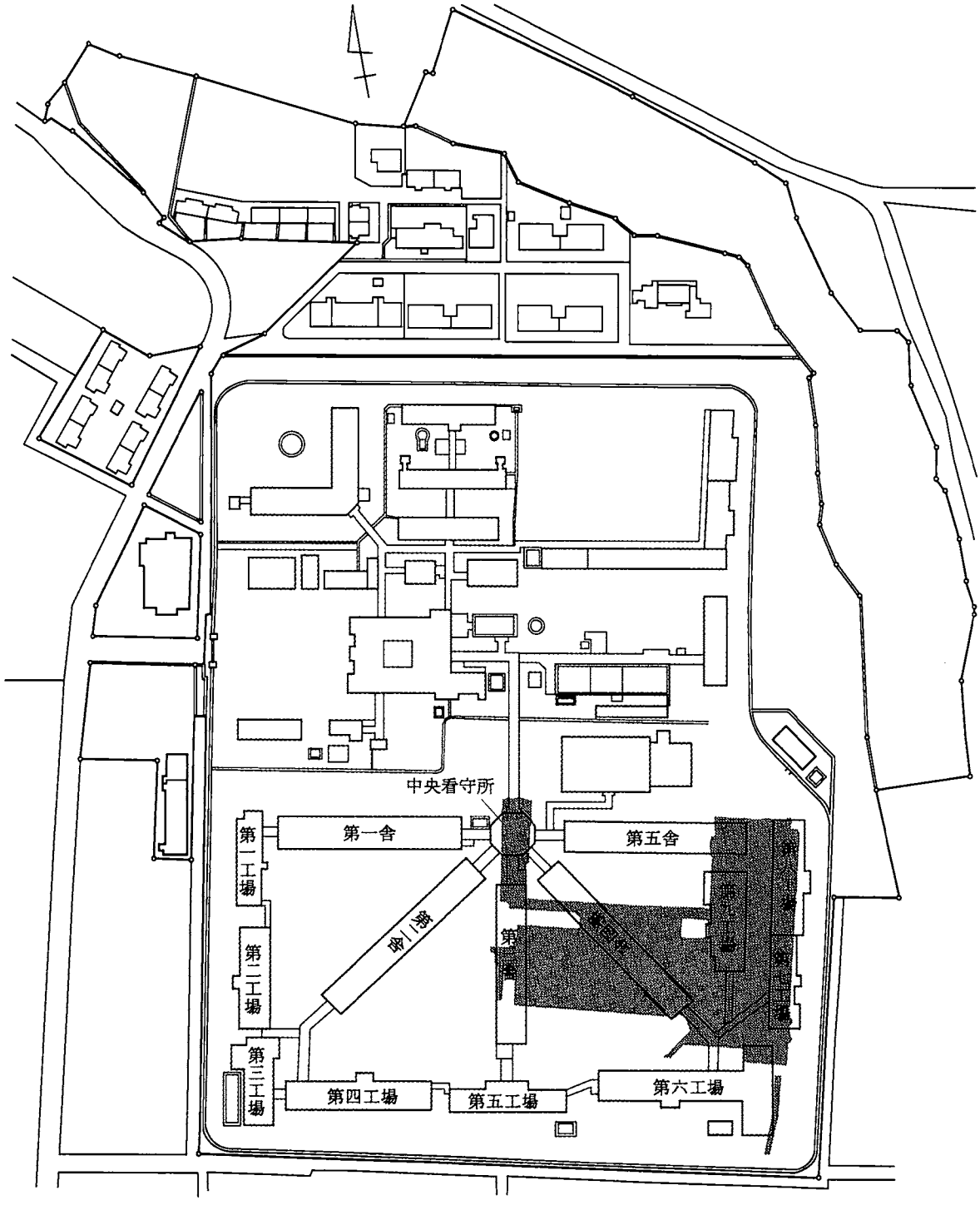


第31図　宝町遺跡(医学部保健学科地区)　旧金沢刑務所(金沢監獄)期　(1/700)



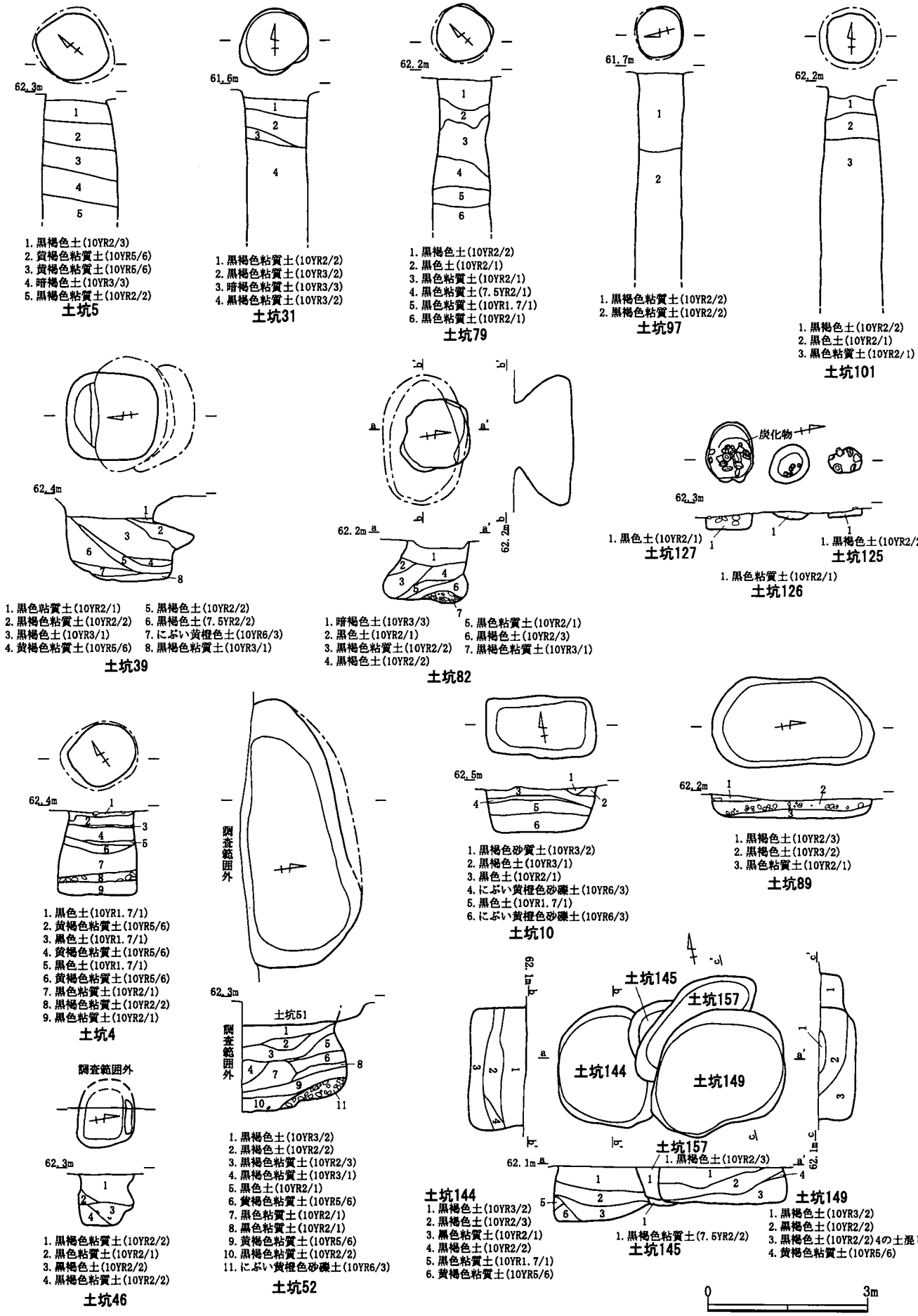
0 20m

第32図　金沢城下絵図(天保・安政間)と宝町遺跡(医学部保健学科地区)対比図　(1/700)

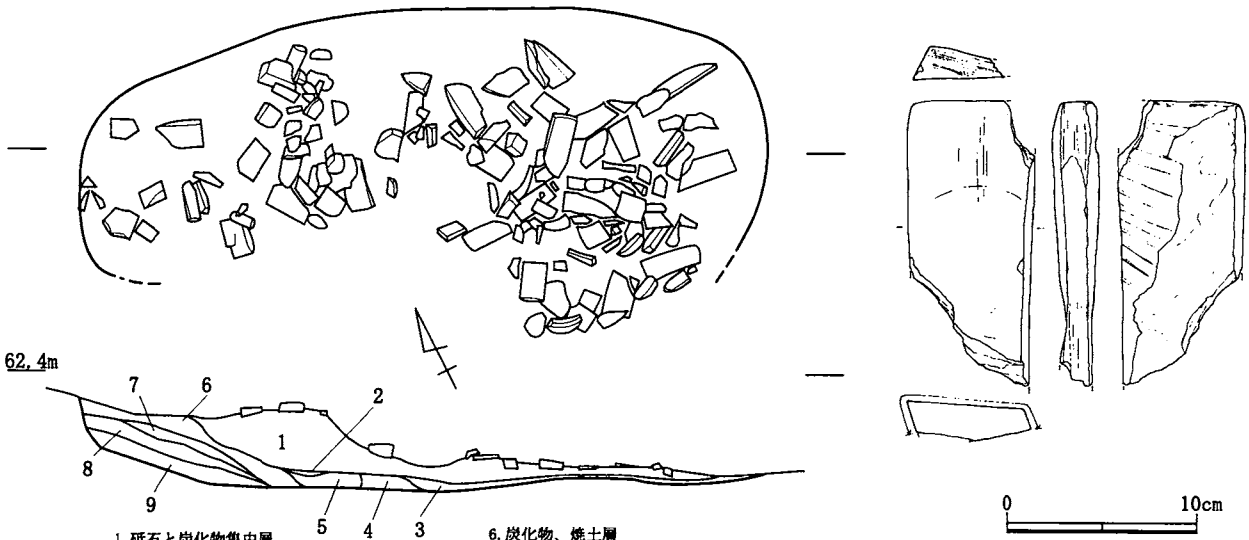


0 100m

第33図　旧金沢刑務所配置図(昭和44年当時)と宝町遺跡(医学部保健学科地区)発掘調査範囲　(1/2000)

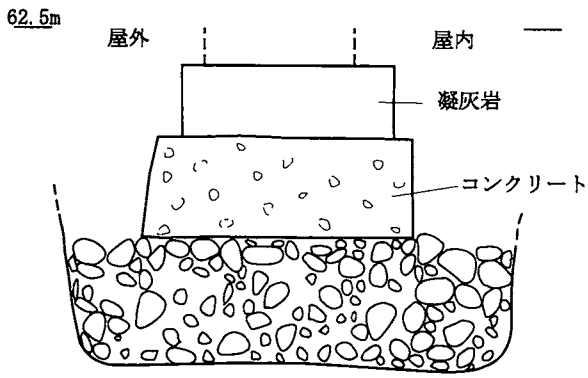


第34図　近世の遺構　(1/100)

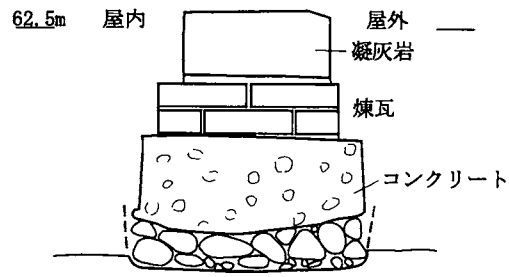


1. 砥石と炭化物集中層
2. 焼土層
3. 暗褐色粘質土(10YR3/3)
4. 炭化物、焼土層
5. 暗褐色粘質土(10YR3/3)
6. 炭化物、焼土層
7. 焼土層
8. 炭化物、焼土層
9. 暗褐色粘質土(10YR3/3)

近代遺構3(1/20)と遺構出土の砥石(1/4)

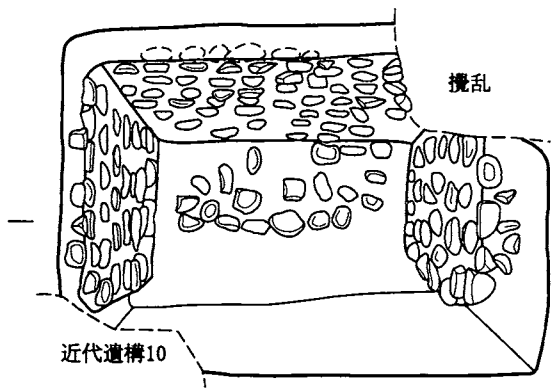


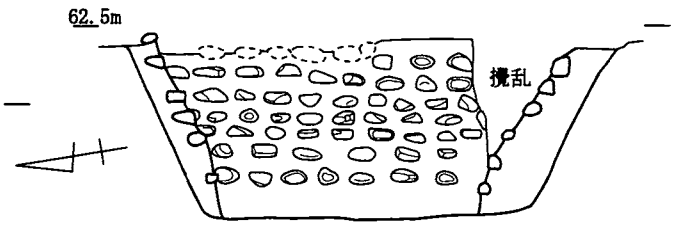
中央看守所基礎断面(1/20)



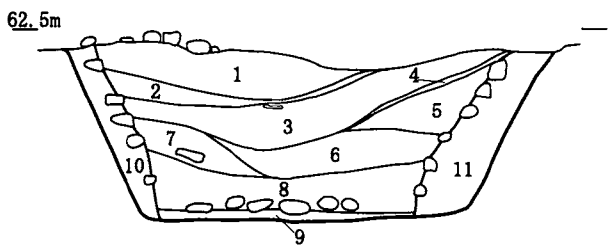
中央看守所から第三舎に至る廊下基礎断面(1/20)

0 1m





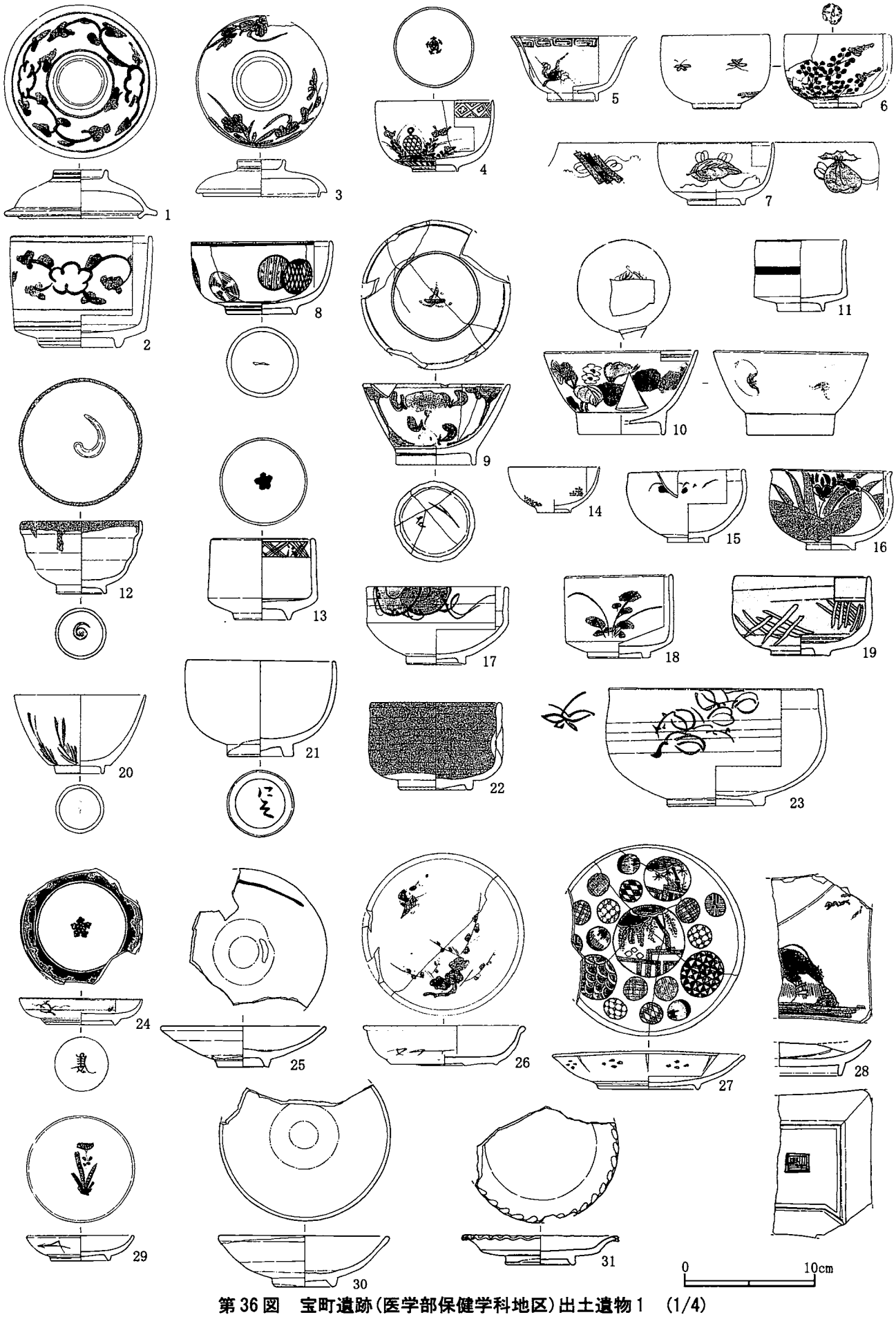
見通し図



近代遺構6(1/60)
1. 黄褐色粘質土(10YR5/6)
2. 黒褐色土(10YR3/2)
3. 褐色砂質土(10YR4/4)
4. にぶい黄橙色砂礫土(10YR7/4)
5. 褐色砂質土(10YR4/4)
6. 暗褐色砂質土(10YR3/4)
7. 黒褐色土(10YR2/2)
8. 黄褐色粘質土(10YR5/6)
9. 暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)
10. 黄褐色粘質土(10YR5/6)
11. 黄褐色粘質土(10YR5/6)

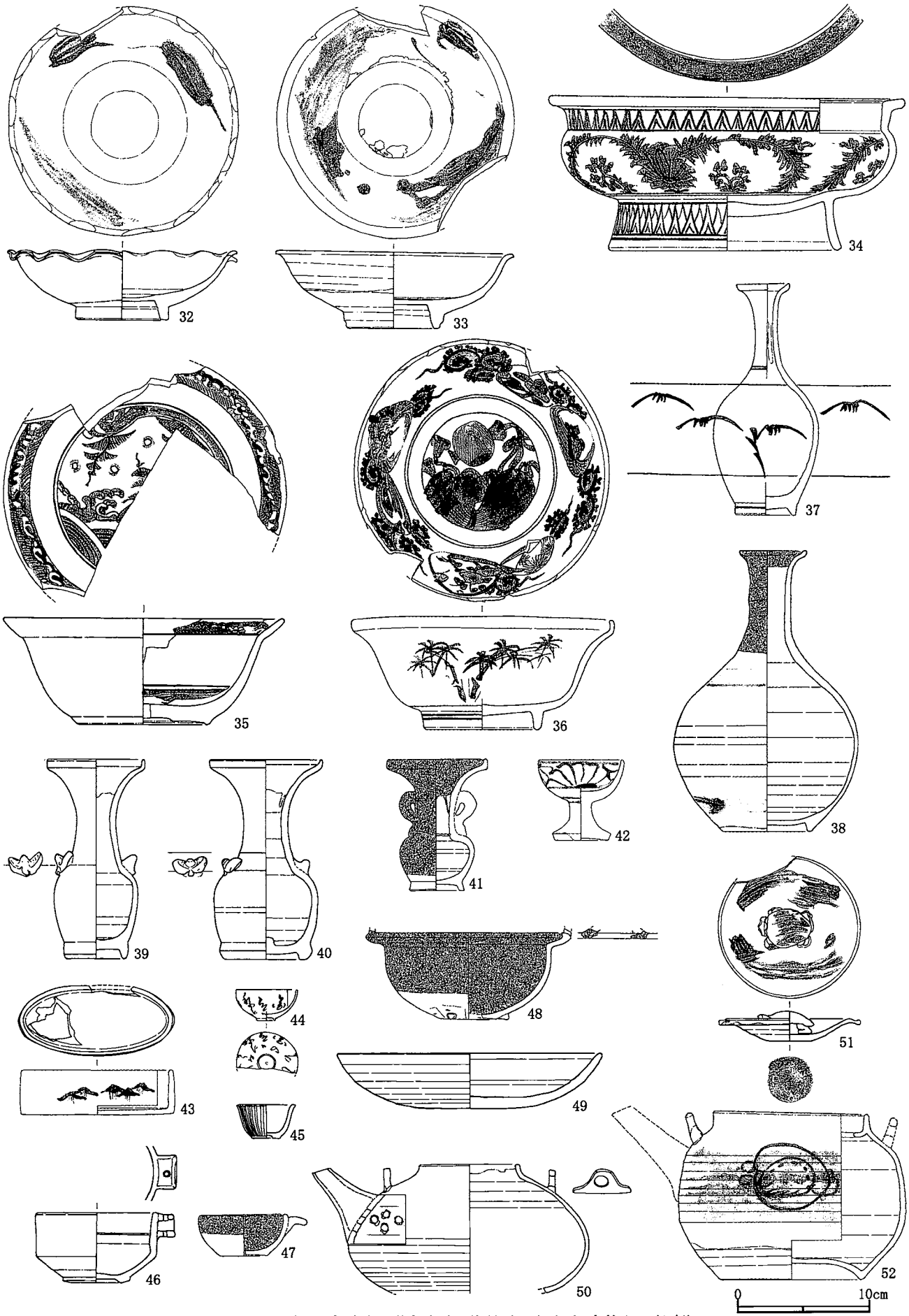
0 2m

第35図　近・現代の遺構 (1/20、1/60)



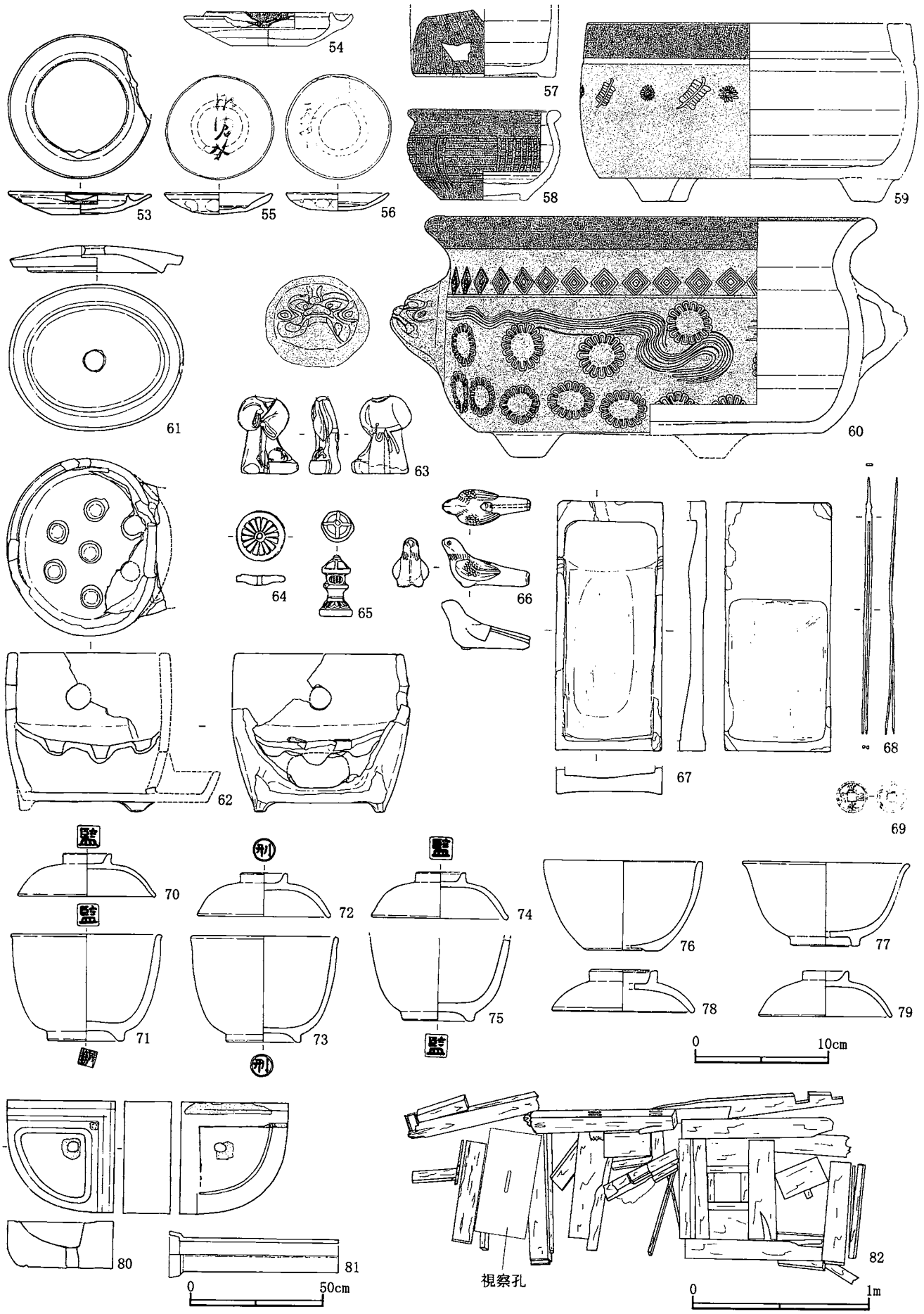
第36図　宝町遺跡(医学部保健学科地区)出土遺物1　(1/4)

1～10・14・15・24～27・29磁器－染付，11・12磁器，13青磁染付，16陶器－色絵・灰釉・鉄漿，17・18・20・21・23・30・31陶器－灰釉，19陶器－黄緑色釉，22陶器－黒色釉，28陶胎染付



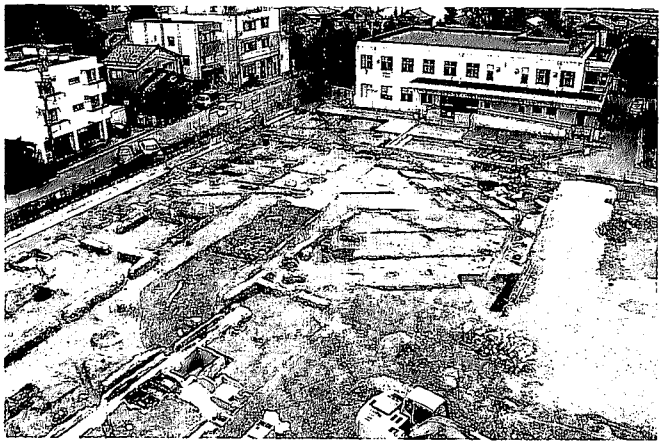
第37図　宝町遺跡(医学部保健学科地区)出土遺物2　(1/4)

32・33・43・46・50～52 陶器－灰釉，33・35・36・42・磁器－染付，34・39・40 青磁染付，38 陶器－茶褐色釉・灰釉，41 陶器－黒色釉，44 磁器－色絵，45 磁器－白磁，47・48 陶器－茶褐色釉，49 土師質土器

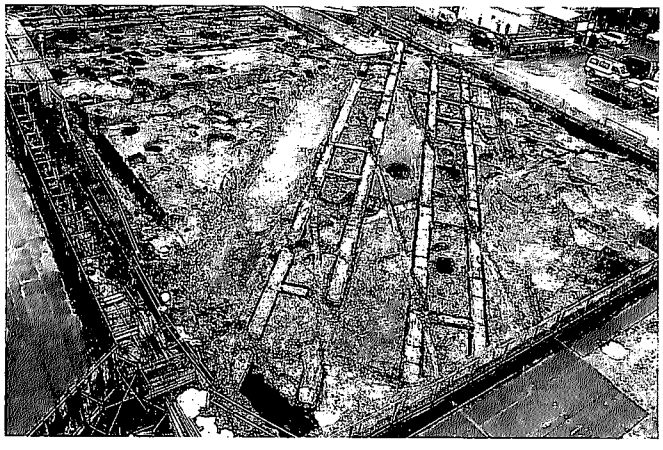


第38図　宝町遺跡(医学部保健学科地区)出土遺物3　(1/4, 1/20, 1/30)

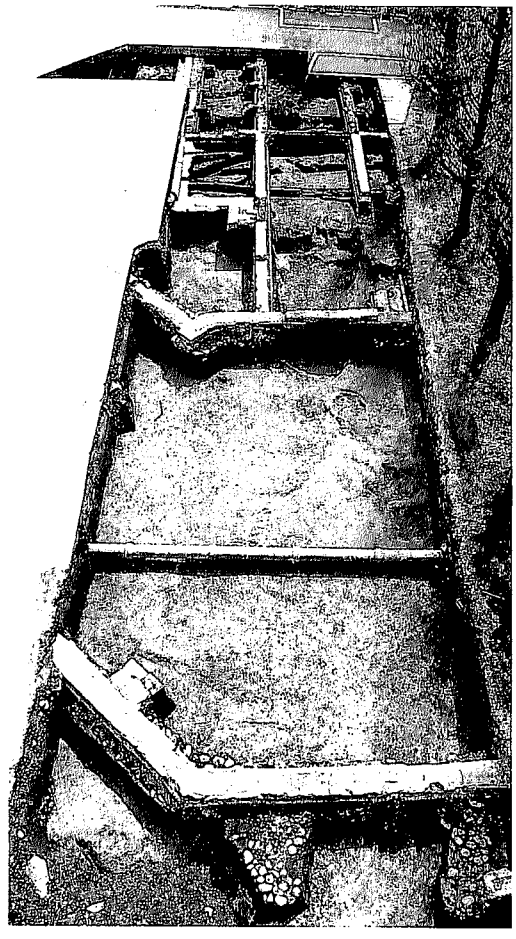
53陶器－灰釉，54土師質土器－黄色釉，55・56・61・62土師質土器，57・58土師質土器－黒漆，59・60土師質土器－黒漆・赤漆，63～66土人形，67石製硯，68簪，69銭貨，70～79硬質陶器，80石製洗面台，81土管，82木製舎房扉



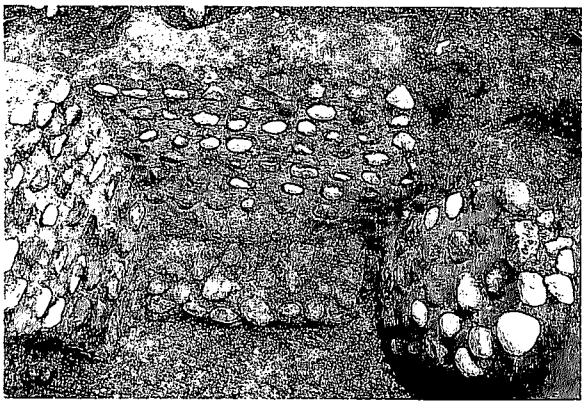
校舎Ⅰ地点　調査区南側　北から



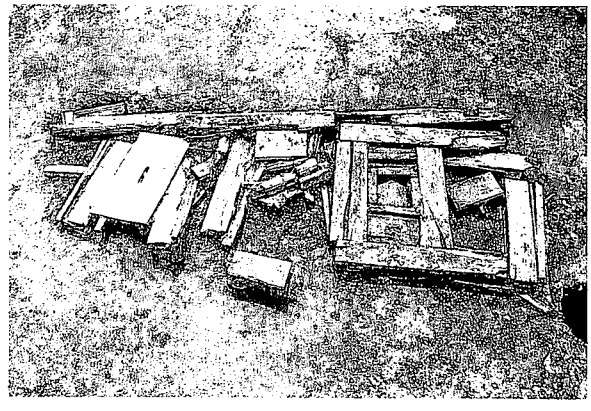
校舎Ⅰ基幹整備・校舎Ⅱ地点　調査区全景　南東から



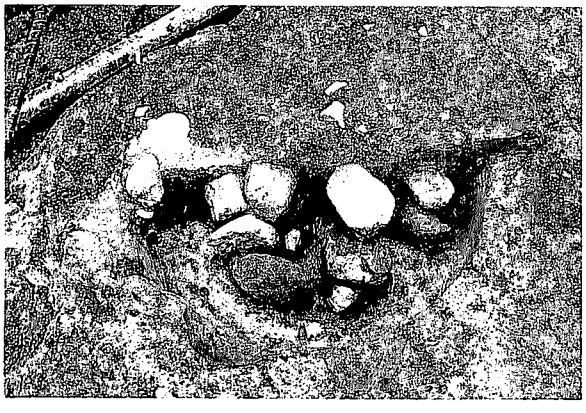
中央看守所基礎と第三舎基礎



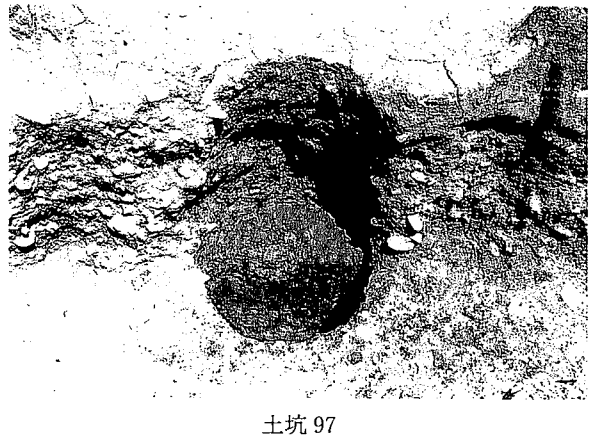
近代遺構 6



刑務所扉



土坑 127



土坑 97

PL. 2

近世出土遺物

刑務所関係食器